

初期江戸幕府における幕政と外様大名

三重大学大学院 教育学研究科

教科教育専攻 社会科教育専修

2024 M01 齋藤隼人

平成二十二年二月十三日 提出

目次

はじめに

一

第一章 江戸時代初期における藤堂高虎の活動

三

第二節 関ヶ原の戦い以前

三

第二節 関ヶ原の戦い後から大坂の陣まで (一) —大坂包囲網の形成—

四

第三節 関ヶ原の戦い後から大坂の陣まで (二) —その他の幕政への関わり—

五

第四節 大坂の陣以降

七

第五節 細川家関係史料から見る高虎と幕府

十一

第二章 藤堂高虎の人脈づくり

十二

第一節 将軍・大御所

十三

第二節 幕閣関係

十四

第三節 大名人脈

十八

第四節 その他の人脈

二十

第三章 他の大名家における幕藩関係と人脈

二十四

第一節 細川氏

二十五

第二節 黒田氏

二十七

第三節 高虎との関係・比較

二十八

第四章 高虎の活躍を可能にしたもの

二十八

第一節 人脈面

二十九

第二節 初期江戸幕府の事情と高虎の特質

三十

おわりに

三十二

藤堂高虎をめぐる人物関係図

参考文献

はじめに

慶長三年（一五九八）の秀吉の死後、関ヶ原の戦いに勝利し、同八年に征夷大將軍となつた徳川家康は江戸幕府を開いた。しかし、幕府の政治機構はまだ未熟であり、それが徐々に整備され、職制や直轄軍団の機構が確立するのは家光の時代になってからである。⁽¹⁾

そのように政治機構の未熟な初期江戸幕府を支えた人々について、藤野保氏は江戸の將軍政治は幕府の基礎作りを主な目的とし、その範囲はほぼ関東を中心としていたのに対し、駿府の大御所政治は全国統治の政權として君臨していたとしている。そして、大御所政治を支えた家康側近メンバーを四グループに分けている。第一グループは新参譜代・近習出頭人で、前者には本多正純・成瀬正成・安藤直次・竹腰正信、後者には松平正綱・板倉重昌・秋元泰朝を挙げている。第二グループは僧侶・学者で、前者には金地院崇伝・南光坊天海、後者には林羅山以下の学者を挙げている。第三グループは豪商・代官頭で、前者には茶屋四郎次郎・後藤庄三郎・角倉了以・今井宗薫・湯浅作兵衛、後者には伊奈忠次・大久保長安・彦坂元正を挙げている。第四グループは外国人で、ウィリアム・アダムスとヤン・ヨーステンを挙げている。そして「家康をとりまくこれらの多彩な側近は、大御所政治の強力なブレーンとなり、徳川権力を強化し、幕藩体制を組織するために、各分野に分かれて、強力な政策をおしすすめた」としている。⁽²⁾

家康・本多正信の死後、新参譜代は徳川一門の付家老となって幕政の中核から離れ、代官頭グループは元正・長安が失脚・死去し、伊奈氏中心になった。そして、幕政の中心には、土井利勝・酒井忠世を中心とする秀忠側近グループが進出し、本多正純の改易後は利勝・忠世の他、安藤重信・井上正就らの秀忠側近で固められた。崇伝と天海の対立は、秀忠側近と結びついた天海が有利になっていく。豪商グループも家康死後は相次いで死去・引退した。このように、家康死後、旧家康側近グループは一部を除いて多くは全面後退した。これは、家康の個人的信任によつて権勢を振るう創業期の側近政治が後退し、江戸幕府という機構の中で將軍の側近達により、幕府が運営されるようになったことを意味している。⁽³⁾

藤井譲治氏は藤野氏と同じように、家康・秀忠を支えたのは、家康・秀忠自身と、彼らの信賴・恩寵で取り立てられた出頭人達であつたとする。主な出頭人としては、藤野氏と重なる人物もいるが、本多正信・同正純・板倉勝重・同重宗・土井利勝・井上正就・永井尚政・松平正綱・伊丹康勝・島田利正・伊奈忠治・小堀政一を挙げ、武士以外では崇伝・天海・後藤庄三郎・亀屋栄任を挙げている。⁽⁴⁾

出頭人政治の特徴は、権力機構としては極めて簡素で、天下人の意志がストレートに反映されることが挙げられる。しかし、個人の能力が力を持ち、恣意性が強く現れる。また、天下人の交替は、出頭人の存立基盤の崩壊を意味し、それまでの諸権限を保持しようとする出頭人の抵抗が生まれ、政權の継承という点では、重要な欠陥を有していた。⁽⁵⁾

山本博文氏は、上級旗本について分析された中で、彼らが幕府と諸大名の間に立って、いわゆる取次の役割を果たしていたことについて、大名にとつては幕閣とのルートを作つたり、幕府の情報を得たり、いろいろと相談したりする為に上級旗本との交際は重要であり、それは自家の存亡にも関わることであつたとしている。⁽⁶⁾

また、幕府の側から見ると、幕府から大名達に直接命令として伝えにくいことは、旗本

などを介してそれとなく知らせ、有力大名が「自発的に」従ってくれるのが一番であった（他の大名は有力大名の行動に追従する）。これならば、大名の体面を潰すことなく、幕府の望み通りに振る舞わせることができ、それが土井利勝ら年寄の任務であった。秀忠の死去までは、幕府の御触も親しい旗本などを通して大名に知らされた。⁷⁾

さて、藤野氏や藤井氏は家康側近メンバーとして、譜代の者以外にも、僧侶や外国人など、多彩なメンバーがいたことを述べており、それは、藤井氏の言うように（出頭人に限っているようにも感じるが）家康の信頼や恩寵で取り立てられていた。そして、秀忠政権になると、一気に譜代家臣中心になっている。天海のように残った者もいるが、家康側近グループの中で、武士以外は殆どが姿を消している。また、藤井氏の研究に、政治的主要人物の居所・行動を分析されたもの⁸⁾があるが、それで挙げられている人物は将軍・大御所・譜代と僧侶である。

これらを見ると、従来の初期幕府論では譜代を中心としたメンバーが注目されている。それは、政治機構確立後の幕府は譜代の人々によって運営されたため、当初から譜代ばかりであったという見方が生まれ、それが通説のようになってしまったと考えられる。しかし、既に明らかになっている家康側近グループの多彩さを見ると、そのような見方は一面的であるように思えないだろうか。少なくとも私はそのような見方には疑問を感じる。そこで、譜代という殻を破って、外様に注目してみたい。単刀直入に言えば、外様大名は幕政に関わっていないなかったのか、ということである。

実はそのような外様大名は実際に存在した。旗本の役割を分析された山本氏が、その過程で細川氏の動向も分析され、細川氏は外様ではあるものの、幕政に一部参画していたことを指摘されている。これは画期的な指摘ではないだろうか。そして、それ以上に幕政に関与した外様大名がいた。それが伊賀・伊勢三十二万石の藤堂高虎である。

高虎は豊臣恩顧大名でありながら、家康・秀忠・家光の側近く仕え、幕閣達とともに幕府の中枢にあつて、初期江戸幕府の幕政に様々な形で深く関与した。しかも、幕府内部の対立抗争で幕閣・徳川一門らが失脚する中、三代の間変わることなく仕え続けた。他の外様大名と比べると、高虎は別格的な扱いを受けている。それは将軍・大御所との個人的な関係もあつたのかもしれないが、高虎が幕政に参画できたのにはその他にも理由があつたはずである。

もう一点、本論で扱う事を述べたい。山本氏が、幕府を支えた人々として旗本を挙げたのは重要であろう。やはり幕政となると、将軍・大御所とその側近が目立つが、幕府の意志を伝える為に、側近以外にも多くの旗本が大名との間に立っていた。またそれは大名から必要とされていた。しかし、そのような役割を担ったのは旗本だけであつたのだろうか？これも、譜代中心の見方の場合と同じように、旗本に限らずにその他の人物にも目を向ける必要があるということである。ここでも細川氏や高虎が良い例になる。

高虎は幕府の中枢にいる将軍・大御所側近達と入魂であり、一方では豊臣恩顧大名でもあるためか、同じ豊臣恩顧大名達ともつながりを持っていた。幕府・幕閣と大名の両者と繋がっているという点で、旗本の立場と似ているのではないだろうか。しかし、高虎は大名であり、旗本ではない。それは、幕府と大名の間に立っていたのが旗本だけとは限らない、ということを示している。

また、旗本は将軍・大御所と直接繋がっていたが、高虎と将軍・大御所との間にも取次

的役割を果たす旗本が必要であったのかも考えてみたい。

以下、初期幕府内における事件や事項のうち、高虎が関与しているものを一つずつ見ていきたい。外様大名がこれ程多くの事に関わっているのは異様かもしれない。

そこでその次に、高虎の幕政関与を可能にした大きな要因として私が考える「人脈」について見ていきたい。政治史を見る上では人間関係は非常に重要である。それは過去だけではなく、現代の政治においても見られるものである。

そして最後に、同じ外様大名である細川氏・黒田氏の対幕府工作を見ながら、人脈も含めて、高虎が幕政に関与できた理由を考え、外様大名としては異色の人物藤堂高虎の特質を考えてみたい。

第一章 江戸時代初期における藤堂高虎の活動

ここでは高虎が初期江戸幕府内外においてどのような活動を行ったのかを見ていきたい。但し、自らの藩内にとどまることなどは省略し、幕府に関わる事項を中心に挙げる。

第一節 関ヶ原の戦い以前

高虎と家康との関係を見る前に、高虎が家康と出会うまでの略歴を見ておきたい。

藤堂高虎は弘治二年（一五五六）、近江国犬上郡藤堂村に誕生した。家柄としては地侍クラスとみられる。元亀元年（一五七〇）、十五歳の時、姉川の戦いで浅井軍として初陣を飾った。しかし、浅井家で同輩と刃傷事件を起こして出奔し、同じ近江国山本山城主阿閉氏（『高山公実録』⁹⁾や『宗国史』¹⁰⁾では名を義秀とする）、次いで磯野員昌に仕え、初めて知行を受けた（八十石）。やがて員昌は養子の織田信澄（信長の弟信行の子）に家督を譲り、高虎も信澄に仕える。しかし、高虎は加増を受けないのを不服として、信澄のもとを去った。それから天正四年（一五七六）に木下（羽柴）秀吉の弟秀長に仕えるまでの経歴ははっきりしない。

秀長のもとでは最初三百石を与えられ、播磨攻略や但馬攻略などで功を挙げ、加増を重ねた。但馬では身内以外の家臣も初めて召し抱え、また正室一色氏（久芳院）を娶った。後に家康のブレーンとなる金地院崇伝も同じ一色氏出身とされる。本能寺の変を経て、秀吉の天下統一戦にも秀長家臣として活躍し、次第に秀長の重臣となっていく。

秀吉の天下統一戦で一つの大きな戦いが天正十二年に家康と戦った小牧・長久手の戦いである。戦後、紆余曲折はあるが家康は秀吉に臣従し、同十四年、秀吉は京都に徳川屋敷建設を命じる。この命を秀長が受け、高虎が建設に関わった。高虎は私費を投じて門を建てるなど、力を尽くし、完成後に家康から賞賛され、初めて書状を送られている。家康に初めて会ったのもこの時とされる。

やがて秀吉は国内を統一するが、天正十九年に高虎の主君秀長が病死し、家督は養子秀保が継いだ。朝鮮出兵では高虎は水軍として活躍するが、文禄の役後、文禄四年（一五九五）に秀保も没する。高虎は主の菩提を弔うため、高野山に入るが、秀吉から直々に召し出されて、伊予国板島七万石の大名となった。以降、秀吉死去まで秀吉に仕えた。

さて、高虎は豊臣氏の家臣でありながら、通説では天正十四年の家康との出会い直後から家康と入魂になり、秀吉の死後は一層家康に接近し、それが幕政関与の要因の一つになったように考えられがちである。しかし、秀吉死去までの期間における家康との関係を示す史料としては、家康から与えられた書状と、『高山公実録』に慶長元年（一五九六）に弟正高を江戸に差し出したと見える以外には確認できない。それらの書状も陣中見舞いなど社交儀礼的なもので、正高を差し出したのは秀吉死後という説もある。勿論、天正十四年以降、徐々に家康との関係を深めていったのではあるが、親しい関係がはつきりと確認できるのは、秀吉死後、慶長四年の石田三成等の家康襲撃計画の時が最初であり、他の大名と殆ど差はないのである。これから関ヶ原の戦いまでは、家康の身辺警護や、襲撃計画の情報を家康に伝えるといった動きが見られ、家康との距離が急速に近くなっていくように見受けられる。そして、やがては幕政に関与する程に信頼されたのである。

家康に接近した時期としては他の大名も大差は無いのに、その中でなぜ高虎だったのだろうか。それには単に家康と親しかったという以外の理由があるのではないだろうか。

慶長五年には関ヶ原の戦いが起こるが、高虎は家康に対して、自分の要請後に江戸を出発して西上するように進言したり、西上途中の家康のもとへ出向いて密談したりしている。また、西軍の朽木元綱・脇坂安治らに内応工作を行った。彼らは黒田長政が調略した小早川秀秋とともに寝返り、東軍勝利に大きく貢献した。高虎が調略したこれらの諸将のうち、朽木・脇坂・小川氏は近江出身者であり、高虎とは同郷である。そのあたりも工作が成功した一因であろう。なお、特に朽木・脇坂両氏とはこれ以降も親しい関係を持つことになる。

このように、関ヶ原の戦いにおいては、単に武功だけでなく、家康との特別な関わりがあり、東軍勝利のきっかけとなった内応工作では黒田長政とともに動き、勝利に貢献するなど、既に他の多くの諸将とは異なった動きを見せている。これを見ても、秀吉生前は家康との特別な関係が見出せないにもかかわらず、秀吉死後直後から特別な関係が突如として現れているのがわかる。なお、黒田氏に関しては、高虎とともに重要な働きをしながら、その後は高虎とは違い、幕府から睨まれるという状況になってしまう。この事に関しては後述する。

第二節 関ヶ原の戦い後から大坂の陣まで（一）——大坂包囲網の形成——

戦後、高虎は加増を受け、伊予今治二十万石を領するに至った。高虎は藩政を行う一方で、幕府の大坂包囲網の一端をも担っていた。その代表的なものが城普請である。

加増の翌慶長六年（一六〇一）に膳所城築城に関わったのを皮切りに、伏見城改修（同七年）・丹波篠山城築城（同十四年）・丹波亀山城改修（同十五年）などである。また、江戸城改修にも縄張りとして関与している。高虎は築城の名手として知られており、単なる一大名として参加したのではなく、縄張りを担当するといった、中心的な役割を果たしている。豊臣大名である高虎が大坂包囲網の重点を担っていたのである。

また、高虎は藩内の城郭も整備している。板島城時代（関ヶ原後加増されるまで）は板島・大津（大洲）・河後森城を中心に行っていた。加増後は今治城を新築し、その他にも『高山公実録』によると、慶長六年に甘崎城改修・灘城築城、慶長九年に塩泉城に養子高吉と

家臣友田左近右衛門が派遣され、慶長十三年には今治城の近くに小湊城が築かれた。⁽¹⁾

このように、伊予国内でも城郭整備がなされていったが、『高山公実録』によると、その理由として、周辺大名、特に福島正則と加藤嘉明への備えが重視されているのがわかる。加藤嘉明は朝鮮の役での武功争いから、藤堂家とは不和になり、そういう意味での備えもあるのかもしれないが、福島正則に関しては、家康から命ぜられたとの説もあり、西国大名の動向を監視する役目を高虎が担っていたことが窺える。豊臣大名である高虎が、幕府のために他の豊臣大名（特に西国大名）の監視を行っていたのである。

家康は関ヶ原の戦いに勝利したものの、この戦いで活躍したのは福島正則ら豊臣大名達であり、戦後も徳川方の勢力を京都以西へ配置することができなかった。⁽²⁾ 豊臣政権時代に徳川氏は政権と東国大名との取次を果たしていたため、東国大名とは元々つながりがあった。一方で、西国に対してはこのようにつながりをあまり持っていなかった。高虎は親徳川方である一方、豊臣大名であるので、幕府は高虎を西国に配置することができたのであろう。西国大名とのつながりが薄かった徳川氏にとって、豊臣大名である一方で親徳川方であり、西国に領地を持つ高虎を利用することで、西国を掌握しようとしていたのではないだろうか。これは徳川譜代の者にはできない事である。

このように、高虎は伊予国内で城郭整備を進めていったが、慶長十三年に伊勢・伊賀に転封となる。伊勢（その一部）にはその前に豊臣大名の富田氏、伊賀には同じく筒井氏が封ぜられていた。筒井氏が故あって改易となり、その後任として、伊勢の富田氏を転封させて、伊勢・伊賀に高虎が封ぜられたのである。この地は大坂（豊臣氏）から東国へ抜ける主要ルートの一つであり、この地に自身の豊臣大名たる高虎が封ぜられたのは、やはり高虎が家康に信頼され、他の豊臣大名とは違った性質を持っていたためであろう。もう一つの主要ルート上にある彦根には譜代の井伊氏が配置されていた。高虎は伊勢・伊賀でも大坂に対する備えとして、慶長十六年から津城と上野城の整備を進めていった。

慶長十四年には、淡路国洲本を領していた脇坂安治が伊予国大洲に転封となり、淡路はしばらく高虎が守備を任された。安治と高虎は前述のように同郷であり、朝鮮の役時に共に行動したり、関ヶ原の役時の内応など、懇意な関係にある。洲本城は東国から紀淡海峡への侵入に備えた城であり、大坂包囲網の一環として、この城の破却は重要であった。その為、高虎が家康に進言し、安治を説得して自領の大洲への転封に応じさせた可能性が高い。⁽³⁾ 大洲は、以前は藤堂藩領であったが、高虎は当時税を免除していた者に対して引き続き免除するように安治に要請している。ここにも高虎と安治との関係が見て取れる。また、同年九月には、幕府が西国諸大名の五百石以上の船を没収し、淡路に集めて破却したが、高虎がその任にあてられたとされる。但し、『高山公実録』など藤堂家関係の史料にのみ記載されていることであるので、確実かはわからない。

大坂の陣までの期間では、大坂包囲網の一つとして、主に城郭整備を行い、幕府に貢献したことが挙げられるが、この他にも高虎は幕政に関わっている。次にそれについて見ていきたい。

第三節 関ヶ原の戦い後から大坂の陣まで（二）—その他の幕政への関わり—

慶長十六年（一六一一）三月、豊臣秀頼が家康の要求に従って、二条城を訪問し、家康

と面会した。これは徳川氏と豊臣氏の力関係を明らかにした出来事の一つであるが、この時、秀頼の護衛として加藤清正・浅野幸長がついた。これは共に豊臣大名であり、親豊臣派である。逆に幕府側からは徳川義直・同頼宣・池田輝政・高虎が出迎えを行った。⁽¹⁴⁾ 義直・頼宣は家康の子であり、輝政は家康の女婿であるので、ともに一門と言え、幕府を代表するには相応しい面々であろう。しかし、ここに高虎が含まれているのはどういうことであろうか。他の三人は一門であるが、高虎は家康の側近であるものの、一門ではない。ここでは、徳川・豊臣の中間的存在として、いわば橋渡しの役割にあったのではないだろうか。秀頼・清正・幸長の豊臣家と、家康・義直・頼宣・輝政の徳川一門という相容れない者達同士を繋ぐ役割であったとすれば納得できると思う。それは同じく豊臣大名でもあった輝政にも言えることかもしれない。

その親豊臣派の代表者とも言える加藤清正がこの会見から三ヶ月後の六月二十四日に死去した。嗣子忠広は幼少であり、幕府は十月に高虎に対し、熊本藩の藩政指導（後見）をするように命じた。高虎は熊本に下り、藩政を指導し、国絵図の提出を行わせたりもしている。高虎が何故この役目を任されたのかはわからないが、高虎は後にも高松藩（生駒氏）や会津藩（蒲生氏）に対しても同様に後見を行っており、後見をできるだけの能力を高虎が持っていたことは一つの要因であろう。また、幼少の藩主に対する後見や国絵図の提出をさせている点は後世の国目付と同じである。

肥後に下る途次、高虎は京都で天龍寺鹿王院と池田輝政との争論の仲裁を行っている。詳細は省略するが、鹿王院が幕府の上意を得た上で、同じく天龍寺の陽春院を破却したが、陽春院は輝政と縁があったため、輝政の怒りを買ったというものである。幕府としては、上意を反故にすると権威失墜につながり、輝政と対立するわけにもいかないという状況にあった。板倉勝重や金地院崇伝が解決に奔走するがうまくいかず、高虎が介入して、鹿王院を離山させ、陽春院を復興させることで解決した。これは、本多正純の個人的判断に基づいて高虎の介入が命ぜられたものと思われる。そして、幕政担当者ではない者（＝高虎）が幕府の問題に関与し、幕府中枢部が彼を積極的に利用したということは、幕府の脆弱さを露呈させることになった。⁽¹⁵⁾

幕府の脆弱さという点では、幕府内での権力争いもその要因の一つと言えようが、大坂の陣までの間では、慶長十八年から十九年にかけての大久保忠隣改易事件が代表的である。この事件は幕府の代官であった大久保長安が慶長十八年に死去し、間もなく生前の不正が発覚して、それに連坐して忠隣までもが改易されたものであるが、武功派の代表である大久保忠隣と吏僚派の本多正信・正純父子との対立も要因の一つである。事件の経過を見ると、本多父子の謀略と思われる点もある。⁽¹⁶⁾ 結果としては、忠隣改易により、幕府内で吏僚派（特に本多父子）が権力を握った。

もう一つの要因として、後述する將軍秀忠のライバルであった松平忠輝排斥問題がある。この一大事件に高虎が関わっている。慶長十八年四月に長安の生前の不正が発覚し、『高山公実録』によると、同年六月、長安の子の改易について、秀忠から仰せがあり、高虎は駿府から江戸に呼ばれた。忠隣改易後は、同十九年一月二十四日に家康が忠隣の居城であった小田原城に着き、翌日には秀忠も到着し、高虎と本多正信を召して密談があった。このように、幕府内の対立抗争であったこの事件に高虎は関わり、本多父子側に立ち、かつ幕府にとっての危険因子（忠輝派）排除の一端も担っていた。高虎は長安の死去直前に長

安から遺書を送られている。長安は弁明とも言える内容を述べ、それを家康に言上してほしいと頼んでいる。しかし、これが高虎から家康に伝えられたかは不明である。⁽¹⁷⁾ 高虎は本多父子に味方しているが、一方で長安から頼りにされるというように、両者と繋がりを持っていたのである。

忠隣が改易された年の末に発生したのが大坂冬の陣である。出陣前に高虎は本多正純から二通の書状（ともに十月二日付）⁽¹⁸⁾を送られ、内容を見ても、両者が非常に入魂であることがわかる。高虎は先鋒を命ぜられ、大坂へ向かった。冬の陣は籠城戦となったが、その最中、次のような謀書（史料①）⁽¹⁹⁾が豊臣方からもたらされた。

（史料①）

重而申遣候、今度者寄特ニ才覚候而、両御所此表へ引出候儀満足不過之候、内々如約束東衆申合急度後切可被仕候、本意之上国之儀、先日被申越通弥不可有相違候、其外何にても可任望候、委細口上ニ申含候、謹言、

十一月廿一日

（秀頼黒印）

藤堂和泉守殿

内容は、高虎が手はず通りに豊臣方に寝返って首尾良く事が運んだならば、望みの領地を与えるというものである。なお、浅野長晟も高虎と同様に寝返るとの情報があつたようである。家康はこの内容を信用せず、高虎としては事なきを得た。しかし、謀書とはいえ、それなりにあり得る内容でなければ意味がない。ならば、これは高虎が親豊臣とも見られていたことを示してはいないだろうか。浅野長晟の場合、浅野氏は秀吉の正室北政所の実家であり、長晟の父幸長は、家康・秀頼の二条城会見時に加藤清正と共に秀頼の護衛をしており、典型的な親豊臣大名である。また、高虎が幕府軍の中で重要な位置にあつたとも言えるだろう。

冬の陣はやがて和議が結ばれ、高虎も翌年一月に帰国した。しかし、間もなく翌年には夏の陣が起こる。高虎は再び先鋒を命ぜられ、大坂へ出陣した。五月六日・七日に決戦が行われ、藤堂軍は六日の長宗我部盛親軍との戦いで多くの将兵を失い、七日は後方に退いたが、幕府軍が崩れたため、再び戦闘を行った。翌八日に大坂城は落城、豊臣氏は滅亡した。大坂包囲網構築に大きな役割を果たしてきた高虎としては、これは大きな区切りになったに違いない。しかし、以降も高虎の幕政への関わりは続くのである。

第四節 大坂の陣以降

豊臣氏が滅亡した翌年の元和二年（一六一六）四月、大御所徳川家康が死去した。高虎は家康の病床で、家康が「高虎と宗旨が違い、死後の世界で会えない」と嘆いたため、家康と同じ天台宗に改宗したと伝えられている。実際、高虎の墓所は寛永寺（天台宗）子院の寒松院である。家康死後の日光東照宮造営では天海・本多正純とともに造営の中心として働いている。

さて、この頃もまだ秀忠政権は安定とは言えない状況にあつた。家康には多くの男子がいたが、秀忠は三男であつた。長男信康は織田信長の命によって自害し、次男秀康は結城

家の養子になっていた。秀忠にとっては、この秀康とその子忠直の他、六男松平忠輝が大きなライバルであった（秀康は慶長十二年に死去している）。秀忠が自らの政権を盤石にするためには、ライバルを排除しなければならなかった。そこで、家康の没後、その年の七月に松平忠輝の改易がまず行われた。これは先述のように、先年の大久保忠隣改易事件と結びついている。

大久保長安は忠輝の付家老であり、長安の背後には忠隣がいた。更に、忠輝は伊達政宗の女婿でもあった。この連合はキリスト教によっても繋がっていた。先年には長安が没し、忠隣が改易されている。そして大坂の陣後に伊達政宗の長男秀宗が伊予板島を与えられた。これは、政宗を忠輝から引き離すための懐柔策であったと考えられる。⁽²⁰⁾

この忠輝改易に高虎が関わった形跡は見られないが、改易直後に高虎は伊達政宗から書状を送られている。その中で政宗は、忠輝の改易は仕方のないことであるとし、秀忠の立場を支持している。これが本心なのか、あるいは高虎にこのような事を伝え、高虎の口から秀忠や幕閣に伝えてくれる（その結果、政宗が疑われなくなる）のを期待していたのかはわからない。

また、この年、高虎の長男高次と秀忠側近の酒井忠世の養女が結婚している。これは高虎が幕府中枢で活躍するのに大きな支えになったであろう。忠世は当初は秀忠の年寄であったが、家光の將軍就任後は家光付の年寄となる権力者である。

更に元和四年には秀忠の命で、高虎の長女と会津藩主蒲生忠郷（氏郷の孫）の婚約が成った。実際に結婚したのは同七年とされている。忠郷の母は家康の娘督姫であるので、家康の外孫と高虎の娘が結婚したことになる。

同年、高虎が以前に藩政指導に赴いた肥後熊本藩で御家騒動が発生した。家臣間の対立で、最終的には御前対決に持ち込まれ、高虎はこの御前対決に参加した。他のメンバーには酒井忠世・本多正純・土井利勝・安藤重信・井伊直孝及び奉行・役人らがいた。結果、訴えられた家臣が処罰された。忠広は幼少のため関わりなしとされ、加藤家は存続した。

元和五年になると、豊臣恩顧大名の代表格福島正則が改易された。この年五月に秀忠が上洛し、その後正則の処遇に関して会議が催され、ここでも高虎はその会議に参加したとされている。メンバーは高虎の他、本多正純・本多忠政・酒井忠世・土井利勝・安藤重信・板倉勝重・井伊直孝とされる。改易に際して、正則が江戸にいたため、東国の大名に警戒体制が命じられた。この時、まだ婚約中ではあったが、女婿の蒲生忠郷が若年ということで、高虎は家臣五名を後見に派遣した。

このように、秀忠政権は豊臣氏滅亡後も幕府を安定させるべく、一族や豊臣恩顧大名の粛正を行ってきた。しかし、それだけではなく、朝廷との関係を良好にする動きも見られた。その典型が元和六年、徳川秀忠の女和子の入内である。

入内の風聞は和子が生まれた翌年（慶長十二年、一六〇八）頃からあったとも言われる。家康は先に孫の千姫を豊臣秀頼に嫁がせており、ここで天皇家とも婚姻関係を結び、国制上の権威を獲得しようとしていたことが窺える。朝幕関係については慶長十四年の宮中女官・公家密通事件などで悪化していた。⁽²¹⁾

実際には同十九年に朝廷から入内の命が下るが、大坂の陣・家康死去・後陽成上皇崩御などで頓挫した。元和四年になって再び入内問題が浮上するが、天皇に皇子が生まれ、早世したものの、これによって入内は再び延期、十一月に高虎が上洛し、善後策をはかった。

翌五年には近衛信尋（後水尾天皇の実弟）と高虎が斡旋に務めた。しかし、その直後に秀忠が朝廷に対して、公家衆の不行跡処断を奏請、またしても入内は延期された。その翌六年になって高虎が再び上洛、朝廷と交渉し、同年六月に入内と決定した。高虎は、最後は恫喝するなど強行な態度に出たという説もある。⁽²²⁾入内により、朝幕関係は好転したが、この入内には、和子に付属した武士二名により朝廷を監視するという意味もあったようである。

さて、既に名前が出てきたが、朝廷と交渉を行った中心人物の一人として高虎が挙げられる。これは（元和五年）九月五日付近衛信尋宛後水尾天皇勅書⁽²³⁾に「今度者藤堂和泉守種々懇切之儀共、難謝次第二候」とあることからわかる。高虎が交渉役となったのは、高虎は近衛家を宗家としているなど、朝廷側の中心人物近衛信尋と深い関係にあったためと考えられる。⁽²⁴⁾高虎と信尋の関係については後述する。

話は朝廷から離れるが、元和七年、高虎は再び藩政指導を行う。この年讃岐高松藩主生駒正俊が死去した。子の高俊が相続したが、幼少であったため、高虎に後見の命が下った。高虎と生駒氏との関係であるが、高虎の養女が正俊の妻になっており、その間の子が高俊である。つまり、高俊は高虎の外孫にあたる。高虎は直接は赴かなかったようであるが、家臣の西島八兵衛を派遣した。八兵衛は後の藤堂藩でもそうであったが、農政に長け、讃岐でも飢饉の際に田畑開発や溜池造成を進めた。寛永六年（一六二九）に一旦高虎は八兵衛を呼び戻すが、高俊の舅土井利勝の要請で再び八兵衛を派遣した。

元和八年、再び幕府内の肅正が起こる。本多正純の改易である。この時、幕府は改易の理由を諸大名に個別に伝えるという異例の形式をとった。その内、細川忠利が聞かされたものによると、福島正則改易時に秀忠に対し、脅すかのような諫言をしたり、宇都宮城を拝領して数年してから、自分には相応しくないと発言するなど、奉公ぶりが良くなかったという漠然としたものであった。しかも、これらの理由は正純の立場からすれば、臣下として別段無礼というものでもない。ただ、正純には独断専行の傾向があり、秀忠としてはこれが意に添わなかったと思われる⁽²⁵⁾。この時の高虎の行動として、高虎が正純の事を讒言したという説があるが、これは後世の随筆（室鳩巢著「可観小説」）にある説なので、単純には信用できない。また、次のような史料（史料②）⁽²⁶⁾も見られる。

（史料②）

一、ちくせんさまへ、我等ぢひつの文遣し候間、ねん入御あけ候て、御返事取候て可給候、
（前田利常）

一、かうつけ殿身上のき、いかゝおほしめし候や、御ふくろのばちかと存候、
（本多正純）

一、貴所と上州間あしき事、ねんころに申上候間、御心やすく候へく候、いさいハ、うた
（本多正純）

殿・大炊殿へ御申候へく候、よく御はうかう候へく候、大すみ殿てまへかわるき無
（土井利勝）

之候、御はうかうめされ候間、御心やすく候へく候、恐惶謹言、
（本多忠純）

十月十三日

藤いつみ

(花押)

（本多政重）
本あわの守さま

人々御中

この文書は内容から、正純が改易された元和八年のものと比定されている。宛所の本多政重は文中の本多忠純とともに正純の弟である。政重はこの時加賀前田家に仕えており、かつて仕官時に斡旋したのは高虎であった。⁽²⁷⁾この書状によれば、高虎は本多兄弟の仲が悪かった事を秀忠に言上している。これは政重への連坐を防ぐためのものであったと考えられる。実際に、十月十一日付本多政重宛土井利勝・酒井忠世連署状⁽²⁸⁾では、政重は連坐しないことが記されている。ただ、入魂であった正純が改易になったにもかかわらず、高虎に悪影響が及んだような形跡は見られない。しかも、早くも政重の立場を守るという行動に出ている。ここに来て正純を見限ったのか、本多一族である政重・忠純だけでも守ろうとしたのかは定かではない。

引き続き、翌九年には越前の松平忠直が改易された。先述のように、忠直も秀忠にとって大きなライバルであり、以前から病氣と称して領国に引き籠もるなど、秀忠とは距離を置いていた。高虎は忠直の反乱に備えて、密かに国許に命じて出陣の準備をさせた。但し、忠直が改易命令に従ったため、出陣はなかった。

寛永二年（一六二五）、天海の願いで江戸上野に建立が進められていた寛永寺と東照宮が完成した。この時天海の他、親藩・譜代の大名達は寛永寺境内に堂宇を建て、寄進した。その寄進メンバーの中に唯一の外様として高虎がいた。但し塔頭については他の外様大名も寄進している。⁽²⁹⁾

寛永四年、会津藩主で高虎の女婿蒲生忠郷が嗣子なく死去し、家光は会津藩の後任大名を誰にすれば良いかを高虎に尋ねた。高虎は、会津は要地であるとし、それを治める器量のある者として、自分とは犬猿の仲であった加藤嘉明を推挙、その通りに嘉明が会津に転封された。嘉明はこれに感謝し、これ以降両家は和睦したとされている。

寛永六年には紫衣勅許事件が起こり、幕府に抗議した僧達に関する評議が幕府でなされたが、高虎は天海・崇伝とともにそれに加わった。崇伝は沢庵らの僧侶に厳罰を主張し、天海は沢庵らを擁護した。高虎は天海側についた。判決としては、沢庵らは流罪になったものの、秀忠は当初は遠島を考えていたようなので、天海の擁護も効果があったようである。⁽³⁰⁾

高虎は晩年眼病を患ったが、それが重くなったのか、寛永年間になると、史料での記述が急に少なくなり、幕政への関与はあまり見られなくなる。そして、寛永七年十月五日に江戸の藩邸において七十五歳で死去した。

このように見てくると、最初に述べたように、高虎が常に幕府の中枢にあり、様々な形で幕政に関わっているのがわかる。大坂包囲網形成や、幕府への危険因子を排除するといった事にも多く関わり、幕府を盤石にするために動いている。

従来言われてきたように、幕閣はこれらの事項には当然名を連ねている。しかし、そこに高虎もほぼ唯一の外様として含まれている。しかし、幕府の法令を發布したり、奉書を

認めるといった幕閣特有のはたらしきをしているわけではない。高虎は初期江戸幕府にとつて特異な存在であったと言える。

第五節 細川家関係史料から見る高虎と幕府

ここまで、高虎の幕政への関わりを見てきたが、藤堂家関係の史料によっている事項も多い。すなわち、高虎に都合良く書かれているということも考えられる。そこで第三者の史料として、細川忠興・忠利往復書状が収録されている「細川家史料」(『大日本近世史料』)から高虎の様子を見ていきたい。史料をいちいち引用すると読みづらいので、最初に関係史料をまとめてあげておく。いずれも書状の一部の抜粋である。なお、典拠文書の表記は「年月日 差出者↓宛所」と記す(以下同じ)。なお、貴田氏・魚住氏宛のものは、事実上忠興宛と見て良い。

(史料③) 元和二年五月二十六日 忠興↓忠利

一、藤泉 (藤堂高虎) 御前如何候哉、承度候事、

(史料④) 元和二年八月十日 忠興↓忠利

一、藤泉州 御前能候由、珍重存候事、

(史料⑤) 元和二年八月二十九日 忠興↓忠利

一、藤和泉殿出頭花かふり候由、満足申候事、

(史料⑥) 元和二年七月十日 忠興↓忠利

一、屋敷之儀先度被申越候、則人を遣候、定而可為参著候、就夫、藤泉州へ被語候へば、泉州則被申上候へば、いつかたにても替屋敷可被下之由、先以忝儀二候、

(史料⑦) 寛永五年十二月十九日 忠利↓貴田政時

尚々、藤和泉殿・堀丹後 (安元)・脇坂淡路 (直寄)、大炊殿別而間能成候而、方々振舞ニも右之衆にて御座候由申候、何事か三人申合、大炊殿へ可申と、事之外氣遣いづれも仕由候、弥大炊殿一人にて御座候、

(史料⑧) 寛永六年五月十九日 忠利↓貴田政時

和泉煩被付以前ニ、内々大炊殿被遣、何哉覽御談合しけく候、最上も国替と申沙汰仕候、

(史料⑨) 寛永六年七月二十七日 忠利↓貴田政時

一、紫野出入、沢庵・玉室・江月京にて書物上り、其儀御腹立にて候故、是へ被詰、御詫言被仕候処、金地院 (崇伝)・南光 (天徳)・和泉召候而、如何可有之儀候哉と御尋候処、先金地院被申

上候ハ、御法度を背、其身も其通白状被仕上ハ、急度被仰付可然之由被申候、南光ハ一

切左様ニ不存候、第一古相国様も紫野成立候様ニとの御仕置、(徳川秀忠)當相国様も御同前之儀候、

(中略)、輕被仰付可然かと、何やらん経文を被引候而被申上候ヘハ、和泉も南光と同前ニ存候由

(史料⑩) 寛永七年五月二十二日 忠興↓忠利

一、其方と我々と、替々ニ被為置候ハん由、伊播州直ニ被申候ニ付、(伊井康勝)其通先日申進之候つる、(中略)其子細ハ、藤堂死たる同前ニなられ候故、御談合可被成衆も無之間、其方を泉州のことくひしと江戸ニ御詰させなさるへき様ニ専申候、

これらの史料から高虎の様子を窺うと、まず元和二年(一六一六)に忠興は高虎の幕府内での様子を気にしており、忠利に対して情報収集を頼んでいる(史料③)。そしてこの時の高虎の様子として、御前でも良い様子であったり(史料④)、出頭ぶりは花が振る程である(史料⑤)という情報を得ている。これに対し、忠興は満足した様子である。同じく元和二年に忠興は、細川氏の屋敷替えについて、「高虎に頼めばどの場所でも替わりの屋敷を拝領できる」としている(史料⑥)。寛永五年には、高虎・堀直寄・脇坂安元が利勝と特に入魂であり、方々の振る舞いにも四人で出向き、他の者達は高虎・直寄・安元の三人に殊の外気を遣っている様子が書かれている(史料⑦)。寛永六年には高虎のところへ利勝が内々に派遣され、談合している(史料⑧)。同年の紫衣事件に際しても、前述と同様に、高虎が加わっていたことが書かれている(史料⑨)。そして、高虎最晩年の寛永七年五月には、「高虎が死同前の状態で、談合する衆がいないので、忠利を高虎のように江戸に常駐させるようにと専ら言われている」との事であった(史料⑩)。

これらを見ても、高虎が幕府内で重要な位置にあったことがわかる。(史料⑥)では、細川氏が高虎による幕府への取次に期待しているように見える。そして、寛永七年の件については、幕府にとつては高虎の重要度がトップレベルであったことを示している。

さて、高虎の幕政への関わりを見てきたが、これらの事跡の中で、高虎と関係を持っていた人物が既に何名か登場した。これらの人物は高虎の活躍にとって大きな助けになったと考える。そこで、次に高虎の人脈について見ていきたい。

第二章 藤堂高虎の人脈づくり

前章で見てきたように、高虎は幕政の中心に関わっていた。その要因の一つとして人脈が挙げられるのではないだろうか。家康・秀忠・家光との関係や、酒井忠世の養女と高次の婚姻を代表とする幕閣との関係は必須であったであろう。その他の要因もあるはずなので、単純には言えないが、いくら能力があろうとも、幕政に参画し、幕府内の権力争いを生き残るためには、やはり人脈が重要であつたに違いない。

また、幕府内の人脈だけではなく、他大名や、武士以外の人々との関係などにも触れておきたい。なお、三十三頁に人物関係図を掲載したので、適宜参照していただきたい。

第一節 将軍・大御所

まず、将軍・大御所との関係を見たい。家康との関係であるが、前述のように、通説では天正十四年（一五八六）の京都徳川屋敷造宮の時を機に両者は親密になったとされている。確かにこの時が最初の出会いであり、徐々に関係は構築されていったであろうが、すぐに入魂になったかというそのような形跡はない。関係が深くなるのは秀吉死後である。秀吉生前も含めて関ヶ原の戦いまでの間に家康から送られた書状を見ると、礼状・陣中見舞・病氣見舞・関ヶ原の戦いの時の指示が主であり、特別なものは見られない。

家康・秀忠・家光から送られた年別書状数は次の表の通りである（高虎個人宛。但し知行宛行状・知行方目録は除く。）^{（31）}

家康・秀忠・家光からの書状数			
年	家康	秀忠	家光
天正 14	1		
天正 15	1		
天正 17	1		
天正 19	1		
文禄 2	2		
慶長 2	2		
慶長 3	2		
慶長 4	4		
慶長 5	4	2	
慶長 11	1	2?	
慶長 12		1	
慶長 13	1	2	
慶長 14		5	
慶長 15		4	
慶長 16		1	
慶長 19	1	3	
慶長 20		2	
元和 2			1
元和 3			1
元和 6			1
元和 9		1	1
元和 6～9			5
寛永 5		1	
不明	4	3	1
計	25	27	10

家康から送られた書状は二十四通で、年代が断定・推定できるものは二十一通である。その内の十八通は関ヶ原以前であり、秀吉生前が八通、没後から関ヶ原前までのものが六通、関ヶ原関係が四通である。関ヶ原時のものを見ると、高虎の戦況報告に対する返事や家康の進軍状況が述べられているが、高虎が進軍中の家康のもとへ向かう予定であることを述べているものもあり、この頃には家康との距離は他の諸将に比べて近かったものとみられる。

続いて秀忠・家光であるが、秀忠の書状は二十七通あり、その七割強が慶長十一年（一六〇六）から元和元年（一六一五）のものである。家光の書状はそれと入れ替わるように元和年間の九通と年不明の一通がある。

書状を見ると、まず慶長六年から同十年までの五年間は家康・秀忠からの書状は確認できない。この理由をはっきりとはわからないが、『高山公実録』や『宗国史』にはこの期間の高虎の行動に関する記述は少なく、高虎の様子があまり窺えない時期である。わかる行動の中では藩政関係のものが目立つ。

そして、家康・秀忠・家光それぞれから送られた書状の時期がほぼ分かれているという特徴もある。家康はほぼ慶長五年まで、秀忠はほぼ同十一年から慶長二十年（元和元年）

まで、家光は年不明の一通以外は全て元和年間となっている。これは乱暴な推論にすぎないが、家康・秀忠からの書状が少ない理由の一つとして、各人に伺候している期間によるという可能性はないだろうか。家康の側に伺候することが多くなったため、家康からの書状が少なくなり、家康死後（元和二年以降）は秀忠の側に伺候したため、秀忠からの書状が少なくなったというものである。側に伺候していれば、個人的な話はわざわざ書状で送る必要はなくなる。家光の書状が元和年間のみなのは何故だろうか。元和九年という年は家光が將軍職を継いだ年であるが、高虎が秀忠だけでなく家光にも頻繁に伺候するようになったのであろうか。ならば秀忠と共に書状が見られなくとも不思議ではない。家康・秀忠・家光の各人にとつて意味のある年と、書状が見られる期間の両端の年がほぼ一致するのは偶然ではない気がする。推論をあまり膨らませることはできないが、高虎に対する書状が見られない理由が伺候していたためであるとすれば、これ程少ないというのは、いかに高虎が伺候していた時間が長いかを物語っている。

また、藤堂邸への將軍・大御所の御成も頻繁に行われている。高虎生前では、外様で高虎以外に頻繁なのは伊達氏や、徳川氏と縁戚の蒲生氏ぐらいである。その他は親藩（多数回）・譜代が占めている。家康らとの関係だけで見れば、やはり個人的関係・信頼が大きかったのだらう。

第二節 幕閣関係

次に幕閣関係であるが、縁者では金地院崇伝・酒井忠世・小堀政一、家臣の縁者の保田・佐久間氏一族、血縁関係は無いものの入魂であった人物としては本多正信・正純父子や天海・土井利勝・朽木元綱がいる。

〔金地院崇伝〕

崇伝は高虎の正室久芳院と同じ一色氏の出身で、慶長十三年（一六〇八）に家康に取り立てられ、そのブレーンであった。「伴天連追放令」「禁中并公家諸法度」「武家諸法度」「寺院諸法度」を起草したのも崇伝である。高虎との関係では、大坂の陣の時には家康の進軍状況や様子を高虎に伝えたり、大坂方面で崇伝の知り合いを頼るように助言したり、崇伝と縁のある寺に制札を出すように要請したりと、関係の深さが窺える。

但し、家康死後は天海との争いに敗れ、徐々に権力は衰退した。その時期の高虎との関係について、「細川家史料」には次のようにある。

（史料⑪）元和二年六月二十八日 忠興↓忠利

一、藤泉と金地院状などの往来ハ候へ共、下ハさんくニ間悪候由、次第くニわるく成可申被存候事、

（史料⑫）元和二年七月十日 忠興↓忠利

一、伝長老と和泉殿間悪事ハ、前から我々存候事、

一、伝長老へ物語ニ、藤泉州と我々とそこハ能も無之由申たると長老被申候由、さる人かたり申候由候、そこから能候ニ付、さやうの儀不申候、其子細ハ今度大坂御合戦之刻も、

藤泉州之手江参候て合戦にも相申候、是一ツにても能は知申事二候、兎角長老ニきつねつき申候かと存候事、

(史料⑪)では、「崇伝と高虎は書状の往来はあるものの不仲である」、(史料⑫)では、「崇伝が高虎と細川家は実は仲が悪いと噂しているが、表裏ともに仲は良い。大坂の陣の際も藤堂軍に加わった」と述べられている。これを見ると、崇伝の権力の衰退とともに、高虎も崇伝から離れたように思われる。しかし、実際は高虎と崇伝との書状のやりとりは続いており、完全に交流が無くなったわけではないようである。ただ、(史料⑪)で述べられているように、それは表面上の交流だけであつたのかもしれない。更に、元和二年八月に崇伝の縁者である久芳院が死去しているのも、高虎と崇伝の関係の変化に影響しているかもしれない。

さて、その崇伝との書状のやりとりに関して、『本光国師日記』(慶長十五年から記述が始まる)より、寛永七年(一六三〇)までの高虎との書状のやりとりを抜き出すと、崇伝発給の高虎宛書状は計百三通、高虎発給の崇伝宛書状は計七十四通である。ピークは慶長十八〜同二十年である。この三年間の各年を〈受取・発給〉で記すと、十八年(十四・十三)、十九年(二十九・二十)、二十年(十一・七)である。元和二年以降はそれぞれ五通未満が殆どとなり、この事からも、崇伝と高虎との距離ができてしまった事が窺える。また、高次とは元和六・七年と寛永二年以降に受取・発給とも毎年一〜五通ある。

崇伝による、他者と高虎の間の書状の仲介も何回か見られる。人物を挙げると、朽木元綱・細川忠興・生駒正俊・南禅寺関係者などである。南禅寺関係者以外は各一回しか見られないが、崇伝を介したつながりが見える(もともと、大名に関しては直接高虎と交流のある人物ばかりであるが)。

後述するが、細川忠興は崇伝から幕府内の内々の情報を得ていたようである(3)が、忠興よりも幕府の内部にいた(つまり、情報を得やすい)とはいえ、高虎も崇伝から様々な情報を得ていたであろう。崇伝の権力衰退とともに書状のやりとりが減少するのは、その事を示す傍証の一つかもしれない。

〔酒井忠世〕

前述のように忠世の養女と高次が元和二年に結婚している。忠世は家光付年寄になつてからはその筆頭である。

高虎死後の高次の相続について、「細川家史料」に次のような史料がある。(史料⑬・⑭)

(史料⑬) 寛永八年一月九日 忠利↓貴田政時

一、藤泉州本気之時、兄二十万石、弟二壺万石被下、御用ニ立候ハ、其時如何様ニも可被仰付候、御ためにて御座候間、両国は可然衆被仰付尤と被申候へハ、一段御機嫌ニ而、わろくハなされましく候との御淀ニ而御座候、就其申候哉、所も替り申なと、申候へ共、実正無御座候、此旨可有披露候、

(史料⑭) 寛永八年二月十五日 忠興↓忠利

一、藤泉州本気之時、兄二十万石弟二一万石被下、御用ニも立候は其時如何様ニも被仰付

候へ、両国ハ可然衆ニ被仰付尤と被申上候へハ、一段 御機嫌にて候つる、左様之事ニ申候哉、所も替り可申なと、申候へ共、実正無之由候、御改易程無之ハ、所ハ其まゝ可為置哉と存候事、

「兄」は高次、「弟」は高重のことである。高虎は生前に、自分の死後、領地の一部は子の高次・高重に与えて欲しいが、残りは「公儀次第に」と申し出、秀忠は上機嫌であった。山本博文氏は、「捨て身の保身術なのか、忠義なのか。ただし長男高次の妻は將軍家光の筆頭年寄酒井忠世の娘だった。このような相続のときに最も力を発揮するのが有力な縁戚である。これは当然、計算されていたであらう。」と述べている。⁽³³⁾ 後述の細川氏の例にも見られるように、外様大名は様々な生き残り戦術を用いた。山本氏の指摘するように、この婚姻は藤堂家生き残り策の一つであつたに違いない。

〔小堀政一〕

高虎の養女が政一の妻という関係にある。政一の父政次（慶長九年没）は元豊臣秀長の家臣で、高虎とは同僚である。関ヶ原後は幕府の備中支配にあたつた。政一はそれを継ぐとともに、院御所造営奉行、名古屋城天守閣普請奉行、禁裏作事奉行などを務めた。また、後に河内・近江の幕領支配も行い、元和九年には伏見奉行を命ぜられ、上方支配も行った。⁽³⁴⁾ また、政一は当代きつての文化人でもあり、高虎は彼を通して多くの人々と関係を持つた可能性がある。これに関しては後述する。政一は高虎が家臣を召し抱える際にも肝煎を多く果たしている。

〔保田氏一族〕

藤堂家の家臣の縁者として保田則宗・佐久間安政・同勝之がいる。藤堂家重臣の藤堂（保田）采女元則の兄保田則宗は元豊臣秀長家臣で、後に徳川家康に仕えた。高虎は家臣に対して、幕府関係の普請や進上物について、本多正純や朽木元綱の他、則宗にも相談するように指示していることが何度かある。佐久間安政・勝之は保田氏一族であり、柴田勝家の家臣として有名な佐久間盛政の弟である。則宗・安政・勝之の三名は、高虎が家臣を召し抱える際にその肝煎となつてることが頻繁にある。

〔本多正信・正純〕

この父子は家康の側近中の側近である。高虎は当初は官途名が佐渡守であつたが、正信も佐渡守であり、重複を避けるために和泉守に改めたとされる。既に述べた大坂冬の陣直前の正純書状（二通）や、正純の弟政重の前田家仕官の幹旋（慶長十六年）を高虎が行っている。この幹旋は正信・正純の依頼をうけてのものであつた。

〔天海〕

高虎とは日光東照宮造営や寛永寺造営などで行動をとみにしている。また、高虎の家臣であつた渡辺勘兵衛が大坂の陣後に勘当されるが、寛永年間に天海・崇伝・土井利勝が高虎に、勘兵衛を許すように説得し、高虎も許したが、勘兵衛は帰参しなかつたことがあつた。その時、天海はさかんに勘兵衛に書状を送っている。前述の如く天海と崇伝はライバ

ル関係にあり、家康死後は天海が力を持っていた。

〔土井利勝〕

秀忠付の筆頭年寄で、高虎の晩年には生駒氏を挟んで縁戚になる。本多正純や井上正就が政界を去り、権力は徐々に利勝一人に集中していった。高虎との関係については、先述の寛永五年十二月十九日付細川忠利書状（史料⑦）にある、利勝・高虎・堀直寄・脇坂安元の話が友好関係の例である。後述するが、堀直寄・脇坂氏とも高虎は親密である。また、幕府の権力者への取次を幕府旗本が務めていたが、この書状にある、他大名の気遣いを逆に考えれば、利勝へ接近したい者が高虎を取次に使っていた可能性もある。

〔朽木元綱〕

高虎と同じ近江出身で、信長・秀吉を経て、関ヶ原では高虎の誘いに応じて寝返った。その後徳川氏に仕え、『寛政重修諸家譜』によると、駿府で常に家康の側に伺候していた。元綱も高虎の家臣召し抱えの際には肝煎を多く務めている。元綱については、高虎とも関係が良好であった近衛家・細川氏や藤堂藩の地元の一身分に本山を持つ真宗高田派とも関係があった。まず、朽木氏の概要について、西島太郎氏の論文⁽³⁵⁾から見ていくことにする。

朽木氏は近江朽木谷を根拠とした一族で、この朽木谷には天文二十年（一五五一）二月から翌年一月までと、同二十二年八月から永禄元年（一五五八）三月まで、時の將軍足利義輝とその随行者達が滞在していた。その随行者の中に細川晴元・三淵晴員・細川藤孝・近衛植家がいた。この時の義輝一行の滞在が、その後の朽木氏と近衛家・細川氏との良好な関係につながっていく。

朽木氏と細川氏の縁戚関係については、元綱の次男友綱が細川忠興に養われ、やがて秀忠に謁見し、書院番のち歩行頭となっている。また、藤孝の甥で忠興の従兄弟にあたる昭貞・昭知は逆に朽木氏の養子となる。後には忠興に仕えた。

元綱についてであるが、彼は秀吉配下を経て、秀吉死後は慶長十三年の醍醐寺三宝院との相論で家康が元綱勝訴の裁定を下したのをきっかけに家康に急接近し、同十八年頃から駿府に居住するようになる。その三宝院との相論に際して、元綱は近江朽木谷に居ながら、多くの情報を得ていた。その情報源には次のような人物がいる。

京都においては川那部八右衛門尉（板倉勝重内者）・棒庵道信（久我祖秀、近衛信尹と親交が深い）・飛鳥井雅庸ら。駿府においては一色龍雲・竹中重義・飯嶋五郎右衛門尉（大久保長安手代）ら。これは一部であるが、非常に多くの人物を情報源としており、元綱の幅広い人脈が窺える。

元綱の駿府移住後の生活はあまりわかっていないようであるが、崇伝とは頻繁に書状をやりとりし、細川氏・飛鳥井家と崇伝との書状の仲介を行っているようである。

家康死後は江戸に移住し、元和二年（一六一六）には秀忠の定めた御咄衆に加えられ、日野唯心・山名禪高・水無瀬一斎とともに「ことさら老耄なれば優待せられ、直日を定めず心まかせにまうのぼり、御談話に侍せしめされ」た。この一年後からは元綱の子の幕府登用がなされた。

以上、朽木氏と元綱の概略を見てきたが、このように見ると、元綱は高虎に比べると家

康に接近した時期こそ遅いが、接近後はともすれば高虎以上に家康の側に仕えているようである。これは高虎にとっては幕閣と同じく、重要な人脈であったことであろう。

さて、朽木氏に関しては真宗高田派との関係があると述べたが、元綱の母が飛鳥井雅綱の娘桃源院で、その兄は高田派十二世法主の堯慧である。更に元綱の妻は堯慧の娘丹桂院である。朽木氏との血縁面でのつながりはここまでであるが、高田派は近衛家・藤堂氏・生駒氏とも縁戚関係を持っている。近衛家・生駒氏は藤堂氏といずれも良い関係にある。これに関しては後でまとめて述べたい。

〔徳川十六将図〕について

余談になるかもしれないが、奥出賢治氏によると、家康と譜代家臣を描いた「徳川十六将図」に高虎が描かれているものがある。福井県福井市に家康の次男結城秀康の墓所である運正寺という寺院がある。この寺にある十六将図には十七人が描かれており、その追加された一人が高虎である。数多い十六将図の中で、外様大名が描かれているのはこの運正寺本のみらしい。高虎が描かれた理由について奥出氏は、結城秀康や福井松平家の家老本多氏と高虎との関係の可能性を考えられているが、いずれも関係は見出せないとのことである⁽³⁶⁾。筆者もこれには驚かされた。しかし、奥出氏と同じく高虎が描かれた理由についてはよくわからない。高虎は幕府に信頼され、外様としては異例なほど幕府に深く関わったので、描かれても不思議ではないが、それならば唯一運正寺本だけというのがまた不思議である。

幕府内の人物で関係が目立つのはこのような面々である。人脈の中で、やはりこれらの人脈は高虎が幕政に関わる上で最も重要だったのではないだろうか。

第三節 大名人脈

他大名との関係では脇坂安治・生駒氏・蒲生忠郷・堀直寄・細川氏といった面々が挙げられる。

〔脇坂安治〕

前述のように高虎の同郷人で、朝鮮の役では共に水軍として出陣し、関ヶ原で高虎の誘いに応じて寝返った。洲本城の一件も前述の通りなので省略する。子の安元は（史料⑦）にあるように、高虎・堀直寄とともに土井利勝と入魂であったとされる。高虎繋がりで利勝に接近したのかもしれない。

〔生駒氏〕

高虎の養女と生駒正俊が結婚していることは先に述べた。正俊の祖父親正は元豊臣秀長家臣で、高虎の同僚である。親正は高虎が豊臣秀保の死後高野山へ入った時に、秀吉の命で下山の説得をした人物でもある。高俊に対する後見は重複するので省略する。藤堂家とは一身田や藤堂仁右衛門高刑を通して関わりがあった可能性もあるが、これに関しては後述する。また、高俊の妻は土井利勝の女で、寛永四〜五年（一六二七〜一六二八）頃結婚

している。高虎の晩年ではあるが、この縁戚関係は高虎だけでなく、その後の藤堂家にとっても大きな効果があったと思われる。土井利勝が西島八兵衛の高松藩への再派遣を高虎に要請した事とも関係があるであろう。

〔蒲生忠郷〕

信長・秀吉に仕えた氏郷の子秀行の子、つまり氏郷の孫である。忠郷への後見も先の通りである。忠郷と高虎の長女が結婚しており、忠郷の母（秀行の妻）は家康の三女振姫である。つまり、家康の外孫と高虎の娘が結婚するという、極めて家康と近い関係にあったのである。ただ、忠郷は寛永四年に嗣子なく没し、蒲生家は断絶した。その後、この高虎の娘は真宗高田派十五世法主堯朝へ再嫁している。

〔堀直寄〕

堀秀政の従兄弟直政の子である。豊臣政権下では秀政の子秀治に付属したが、弟の直次によつて追放された。後に家康から五万石を与えられ、元和四年（一六一八）には越後村上で十万石を得た。高虎とどういう経緯で関係を持ったのかはわからないが、彼も確認できるだけで六、七回は藤堂家の家臣召し抱えの際に肝煎となっており、これは多い方である。『公室年譜略』⁽³⁷⁾では「直寄侯ハ 公ト善シ故ニ此侯ノ肝煎ニテ 当家ニ召抱ラルト多シ」⁽³⁸⁾と記している。（史料⑦）にある、土井利勝に付いていた三名の中に直寄がいることから、利勝や高虎と深い関係があったのは事実であろう。

〔細川氏〕

細川氏に関しては、幕府との関わりや人脈等は後述するので、ここでは極力高虎との関係にとどめて、「細川家史料」や山本氏の『江戸城の宮廷政治』から見ていきたい。

高虎と細川氏は関係が良好であったとされるが、それは細川忠興・忠利父子の書状からも窺うことができる。父子は幕府内における高虎の情報や、高虎の病状などを細かく情報交換している。関係史料を「細川家史料」から挙げる。

（史料⑮） 元和六年六月晦日 忠興↓忠利

一、此儀ハ自筆にて可申と存候へ共、遅り候間先申候、藤泉州^(藤堂高次)ハ自筆ニ而節々状参、大学と其方無等閑仕候へと被申越候由候、泉州われく間能候間、可被申談候事、

（史料⑯） 元和六年九月二日 忠利↓魚住伝左衛門

一、筑前縁辺之儀、何共とりさた無御座候、（中略）藤和泉殿^(黒田長政)ハ切々我等所、又子息大学殿所へ状給候て、此縁辺の儀何とぞ聞立候へと、節々御申越候、此度又状下り申候、彼縁辺之儀不入儀候間、必とりさた仕ましき由、大学殿へも我等所へも御申越候、扱ハ聞定られ候哉と存候、下ニてハ一切しれ不申候、大草殿^(公卿)ハも于今何共不申来候、

忠興は忠利に対し、高虎にこまめに会い、それを続けることを指示し、忠利も高虎の行動を手本にしていた。高虎も忠興に対し、高次と忠利が親しくするように頼み、忠興は忠利に対して、高次といろいろ話すように伝えている（史料⑮）。

また、高虎・細川氏と不仲であった黒田長政の娘と將軍家の縁談話が出た時に、高虎は忠利や高次に書状を送り、情報を集めるように頼んでいる（史料⑯）。その他にも高虎が細川氏と不仲な人物と交際している事について、忠興は気にしていたようである。そのような人物としては黒田氏の他に堀直寄・井伊直孝・脇坂安元がいる。

高虎を通じた幕府との関係については、参勤や普請その他の事を伝達する相手や相談相手として、幕府関係者とともに高虎の名前がある。幕府関係者では特に土井利勝が高虎とともに挙げられている。

細川家関係史料や藤堂家関係史料の中には、高虎と細川父子がやりとりした書状は見られないが、細川父子間の書状からは約十回ほど高虎との書状のやりとりがあったことがわかる。また、『本光国師日記』にも五回のやりとりが見える（うち二回は崇伝・高虎連名）。後述するが、細川氏は忠興の父藤孝（幽斎）以来、公家や文化人との交流も深かった。小堀遠州と同じく細川氏も高虎と文化人とを結ぶ役割を担っていた可能性がある。

大名関係の人脈はこのあたりが目立つ。外にも加藤清正や桑山氏・池田氏などが挙げられる。高虎は大名同士でも広い交友関係を築いている。

第四節 その他の人脈

その他の人脈として、公家の近衛家や宗教関係者がいる。また、高虎の得意分野の一つに築城があったが、大工とも関係があったとみられる。

〔近衛家〕

近衛家との関係は、高虎が天正十五年（一五八七）の九州出兵後に従五位下佐渡守に叙任された時からである。その時に高虎は藤原氏支流の立場を選んで近衛家を宗家と仰いだ。高虎の時期の近衛家当主は信尹・信尋である。

信尹については、高虎との交流は確認できない。一部しか残存していないが、信尹の日記に『三藐院記』がある。ある程度残っている慶長三（一五九八）・四・六・七・十一年における諸大名との交流（贈答・来訪・茶会や宴席に同席など）を抜き出すと、回数が目立つのは島津氏（一族・家臣）・黒田氏（孝高・長政）・桑山氏（一晴・重晴）・加藤清正・山岡氏（景友・景以・景宗）・伊達政宗・津軽氏（為信・信建・信牧・建広）・板倉勝重といった面々である。桑山氏・山岡氏・加藤清正・板倉勝重（殆ど慶長十一年）は特に多い。この中で、高虎と関係が深そうなのは、桑山氏（秀長家臣時代の同僚）や加藤清正などである。

信尋は後水尾天皇の実弟で、信尹の養子となり、政治的にも文化的にも公家社会の頂点にいた人物である。前述の如く和子入内時に高虎と信尋がそれぞれ幕府・朝廷の代表として奔走している。

信尋の日記である『本源自性院記』には諸大名との交流は殆ど見られない。高虎に関し

ては、少将に叙任されたという記述があるのみである。しかし、実際には高虎との交流はいくつかある。

元和四年（一六一八）十一月には、上洛した高虎が信尋を尋ねている。「時慶卿記」には高虎の近衛邸訪問や、信尋の藤堂邸訪問、そこでの宴会や船遊びなどが記されている。³ 同席した人物として、西洞院時慶・烏丸大納言・三宅亡羊・徳勝院・一条殿・十宮御方が見える。この時、高虎は公家衆へも金子等を贈っている。

寛永元年（一六二四）には信尋が伊勢参宮の途中で津城を訪れ、高虎はこれを大いに歓待している。同六年十二月には高虎は信尋を通して朝廷に歳暮の献上を行っており、藤堂家はこの後も毎年十二月に朝廷・近衛家・京都所司代に贈物をするようになったという。また、信尋が江戸に下向した際に藤堂邸を訪れることもしばあったようである。⁴⁰

近衛信尋と高虎との繋がりには、直接の繋がり以外にも、小堀政一との関係もあると思われる。政一は特に茶を通して武家・公家・僧侶など、多くの文化人と交流をもっていた。その一人が信尋である。政一の茶会に信尋・高虎が揃って招かれたこともあり⁴¹、政一繋がりのルートもあったのは確実であろう。

以上のように、高虎は近衛信尋とはかなり深い親交があったようである。また、元和四年の例を見ると、他の公家衆との交流も見られる。高虎の公家社会とのつながりは、京都とつながりの薄い幕府にとって重要なものであり（勿論、細川氏なども同様に重要視されたであろう）、和子入内交渉において、幕府が高虎に注目した理由の一つに考えられる。

〔真宗高田派〕

真宗高田派は、浄土真宗の一派で、本願寺派・大谷派に次ぐ第三位の規模を持っている。本山は現在の三重県津市一身田の専修寺である。歴史については省略するが、元々の本山は下野国の専修寺であり、一身田の専修寺が本山として機能するようになったのは天文年間（一五三二～一五五五）のようで、高虎の伊勢・伊賀転封以前からこの地域に根付いていた勢力である。^{（42）}

高田派に関する高虎関係の人脈を挙げると、前述のように近衛家・朽木氏・生駒氏がある。前頁の系図を参照していただきたい。朽木氏との関係は重複するので、ここでは述べない。

近衛家との関係は、十三世堯真（堯慧の子）・十四世堯秀（堯真の子）・十五世堯朝（堯秀の子）・十六世堯圓（花山院定好の子）（以降は省略）がいずれも近衛家の猶子となっていることである。すなわち、堯真は前久の、堯秀は信尹の、堯朝は信尋の、堯圓は尚嗣の猶子となっている。これは代々の近衛家当主である。世代的にそうなってしまったのかも知れないが、前久と堯真以降、それぞれ次の世代どうしで猶子関係をもっているのである。

また、高田派は中興上人とされる真慧（永享六く永正九、一四三四～一五一二）以来、公家社会に接近し、真慧の子応真の後継辞退後に皇族常磐井宮家から真智を迎えるなど、公家社会とは深い関係にあった。堯慧も飛鳥井家から入室している。高田派は門跡寺院でもあり、公家社会との深い関係など、格式の高い宗派であった。

次に生駒氏との関係であるが、これは今のところは『宗国史』のみで確認したにすぎず、文章も難解であるため、詳細は括めていない。現時点で『宗国史』から読み取ったところを述べると次のようである。堯真の妻大信院は織田信清（信長の従弟）の娘であり、同じく信清の娘が松永伊勢守に嫁し、死別後に生駒親正に再嫁したというのである。その間の子が一正という。そして、伊勢守との間の娘が高虎の養女となり、藤堂仁右衛門高刑に嫁している。高虎が伊勢・伊賀に転封になり、専修寺を訪れた際に、高刑は「自分の家と専修寺は以前から縁戚である」と言って喜んだとされる。伊勢守の娘を高虎が養女として高刑と結婚させたというのは『寛政重修諸家譜』などにも記されており、真実であろうが、信清の娘と生駒親正の婚姻については、『宗国史』にしか見えないので、まだ確定には至っていない。

最後に藤堂氏との関係については、堯朝と高虎の娘（高松院、蒲生忠郷後家）が結婚しており、堯朝死後に後継となった堯圓が高次の娘（大空院）と結婚している。しかし、高松院・大空院ともに子が法主後継者となることはなかった。また、高田派の本山専修寺は藤堂藩の地元一身田にあり、地理的關係でもつながりはあったであろう。高次の代には藩から寺領が寄進されている。

以上、高田派の持つ縁戚関係を見てきた。朽木氏が縁戚関係を持った時期と藤堂氏が縁戚関係を持った時期は確実に差がある。しかし、朽木氏と高田派の関係は少なくとも元綱存命中は続いたであろうから、高虎は高田派を通して朽木氏ともつながりを持っていたことになる。また、生駒氏との関係も『宗国史』の記述が真実であれば、更に深い関係となる。近衛家に関しては、高田派は近衛家と代々関わりがあり、近衛家と良好な関係にある高虎はこれまた更に深い関係を持つことになる。

このように、藤堂氏と近衛家・朽木氏・生駒氏は他の理由からも良好な関係が窺われる

が、高田派を通して更に二重・三重の関係を持っていることになる。

〔小堀政一関係〕

政一が関係を持った人物としては、既に述べた人物も含めると幕府の太田頭中井正清、公家の近衛信尋・日野資勝・中沼元知、僧侶の金地院崇伝・松花堂昭乗・鳳林承章、武家の前田利常・永井尚政などがある。

松花堂昭乗は近衛家から目を掛けられ、扶持を与えられている。中沼元知は昭乗の弟で、政一とは妻同士が姉妹であり、近衛家に仕えていた。鳳林承章は後陽成天皇の従兄弟で、朝廷に顔が広く、文化サロンの主であった。⁽⁴³⁾更に、政一の異母弟正春の妻は坊城俊完の養女で、この俊完は後水尾天皇側近グループの一人でもあった。⁽⁴⁴⁾このように、政一は公家と幅広く交流しており、高虎の朝廷工作の際にはこの人脈は大いに活用されたということも想像される。

〔豊臣秀長関係〕

高虎の旧主である豊臣秀長関係では、秀長家臣時代の同僚は既に述べた人物の他に杉若無心がいる。秀長死後は秀吉に仕え、関ヶ原で西軍に属して改易された。没年は不詳であるが、慶長七年頃には公家との交流が見られるという。『三藐院記』でも、近衛信尹との交流が見える。没年がわからないので、時期の下限によっては関連が薄くなってしまうが、小堀政一や細川氏と同じく、高虎と公家・文化人の間に位置する人物である。

また、秀長は千利休とも交流があり、家康とも公私にわたって交流があった。豊臣政権内部では、東国政策をめぐって対立があり、一つは石田三成らの官僚グループ、他方が秀長・利休・家康のグループであった。⁽⁴⁵⁾利休―秀長を通して、高虎も多くの文化人と会っていたかもしれない。そして、家康に接近するきっかけもこの秀長であった。高虎の出世のきっかけとされる秀長であるが、人脈構築においても秀長に仕えたことは非常に大きな意味があったと言える。

〔大工〕

大工としては、小堀政一とも関係のあった幕府大工頭中井正清、正清の下にいた甲良豊後守宗広、石垣積みみのプロ集団穴太衆がいた。宗広や穴太衆は近江出身であり、特に宗広は高虎と同じ犬上郡出身である。⁽⁴⁶⁾ここでも近江人脈が活かされたのだろう。

以上、高虎の人脈を見てきたが、武家だけにとどまらず、実に幅広い人脈を持っている。幕府との関わりを見る上では武家関係者が重要そうに見えるが、公家や文化界の人脈もしっかりと押さえている。

第三章 他の大名家における幕藩関係と人脈

ここまで高虎の幕府との関係（特に、幕政への関わり）と人脈を見てきた。ここで、簡単にではあるが、他の大名のそれを見ることで、高虎との比較をしてみたい。取り上げる

のは高虎とも関係が良く、既に頻繁に登場している細川氏と、高虎や細川氏とは関係が悪かった黒田氏である。(47)

第一節 細川氏

細川氏は室町期以来の名門大名であり、豊臣政権期を経て、関ヶ原の戦いでは東軍に味方し、戦後は豊前小倉を与えられ、肥後加藤氏の改易後はその後を受けて入封した。忠興とその子忠利はともにこの時代に藩の基礎を築いた人物である。

忠興と忠利は江戸や国元を中心に活動し、お互いに情報交換をしていた。特に幕府の情報を多く知らせている。これら父子間の非常に多くの書状は既に取り上げた「細川家史料」に収められている。

さて、具体的に細川氏の活動を見ていくことにする。秀吉死後から話を始めると、忠興は三成と対立し、親家康派であったが、長男忠隆の妻が前田利家の娘であったので、家康と利家の和睦の仲介となった。しかし、利家死後は利家嫡男利長の謀叛疑惑に連坐して疑われ、忠興は家康に誓紙や人質を出して前田家とは断交し(元禄年間まで断交状態)、完全に家康側の勢力に入った。その後忠興は家康から加増を受けるなどしている。関ヶ原の戦いでは『徳川実紀』に、「関ヶ原の役に当家随一の御味方」と記されている。

関ヶ原の戦い後、細川氏は豊前小倉を与えられる。この転封の直前に忠興の長男忠隆が廃嫡される。これは家康が、前田利家の娘と結婚していた忠隆を廃嫡するように迫ったものとみられる。家督は慶長九年(一六〇四)に、次男興秋をも差し置いて、三男忠利に決定した。

時代は一気に下るが、寛永九年(一六三二)に肥後の加藤氏が改易となり、その後細川氏が移された。これは、細川氏が外様ながら徳川氏の覇権確立に忠実であり続けたことと、九州での長期の統治経験によると思われる。幕府は、肥後に親幕府的な細川氏を配置することで、有力外様大名(黒田・鍋島・島津等)相互の牽制構造を作り上げようとしたと思われる(特に島津氏への押さえとしての役割を重視した)。

忠利は新領国肥後での藩政に取り組む一方で、幕府政治に自ら関わりを求め、積極的な政治活動を展開している。特に注目されるのは参勤・在府制改革とキリシタン改めの全国的実施に向けての働きかけがある。参勤制度については、忠利は寛永十一年に將軍家光への取次を意図した書状で「とかく天下の大病は下々の草臥迄にて候」と言い切り、参勤・在府制度の改革を提起した。この提案は家光に取り次がれ、翌年の寛永武家諸法度に反映された。

先にも述べたが、高虎最晩年の寛永七年五月二十二日忠興書状(史料⑩)では、「忠利を高虎のように江戸に常駐させるようにと専ら言われている」と述べられている。高虎の幕府との関係を裏付ける一方で、細川氏と幕府の関係が、高虎に次ぐものであったことも示している。忠利の死去後、その子光尚の相続が認可された時に、幕府は細川氏を「御譜代同前」に思うとの言葉を伝えている。細川氏がどれほど幕府から信頼を得ていたかがよくわかる。

以上のように、細川氏も幕府と親しい関係にあり、忠利に見られるような、幕政への関わりも見られる。では、このような細川氏の人脈はどうであったのだろうか。

細川氏と高虎の関係は勿論であるが、他に忠興の場合は谷衛友・曾我尚祐（旗本）・丹羽長重・立花宗茂・島津家久、忠利の場合は木下延俊・稲葉典通（二人とも忠利の縁者）・稲葉正勝（後の幕府年寄）・曾我古祐（尚祐の子）・加々爪忠澄・榊原職直・堀直之といった人物がいた。

さて、崇伝との関係について、高虎の場合と同様に見てみると、慶長十六年～寛永七年の間で、崇伝―忠興間の発給・受給が計約三百三十回、崇伝―忠利間が同約百六十回見られる。これは崇伝―高虎よりも圧倒的に多い。ピークは慶長十八年～元和三年（一六一七）であり、それ以降は減少している。崇伝が仲介しているのは、細川氏と本多正純・高虎・天海といった人物との書状往来に見られる。

大寫聖子氏によると、細川氏への幕府からの情報伝達ルートは大きく二つあり、表向きは本多正純からのルートで、水面下では崇伝からのルートがあった。崇伝から得られる情報は、崇伝が家康側近であるが故に入手できる内々の未決定段階の情報であった。しかし、それらの未決定段階の事項がどのように最終決定したかを崇伝は把握していなかったとのことである。細川氏と崇伝の関係は慶長十八年末頃から急速に強化された。崇伝は細川氏に対して、情報提供と、本多正信・正純への取次をつとめることをその役割としていた。そして、崇伝が忠興との関係に相当するような関係を作った大名は他に見られないとのことである。（48）

また、忠興の父藤孝（幽斎）が優れた文化人であったことから、公家衆・文化人との関係も挙げられ、忠興は千利休とも交流があった。そして、この千利休の場合は文化面での交流だけではなく、政治面でも細川氏が利休を通して秀吉に報告をしたり、豊臣政権内部の情報を得たりするというように、政治的な面でもこの人脈は活かされている。

細川氏の重臣松井康之も文化人であり、千利休や古田織部とも親しく、文禄四年（一五九五）の秀次事件の際には既に家康とも旧知の間柄であったようである。

このように、細川氏は幕府重臣や旗本と関係を築き、公家・文化人とも関係があった。高虎の場合と同じく、幕府内部の人物と良好な関係を築き、父子間の書状や崇伝との関係に見られるように、幕府内部の情報を得、それを活かすことで、幕府と良好な関係を保つことができ、幕政に関わりを持つこともできたのであろう。

一方で、細川氏と不仲であった人物を挙げると、高虎とも不仲であった黒田氏がいるが、高虎と入魂であった堀直寄・井伊直孝・脇坂安元といった人物もいる。

高虎が絡んでいるものを挙げると、まず黒田氏の場合は、次のような史料がある。

（史料⑬） 元和六年三月二十六日 忠興↓忠利

一、藤いつミと黒筑間、むかしのことくあしき由被申越候、内せう能々可被尋候事、

（史料⑭） 元和八年四月七日 忠利↓魚住伝左衛門

一、藤和泉殿之事、黒筑前殿と間よく御成候様ニ成かゝり申候、はや筑前祝言之時ハ人も

参候由、牧齋御申候、大炊殿とも間筑前よく成申候様ニ申候、いか様、若君様を

むこ二とり申候事すみより申候か、水戸宰相殿をむこ二とり申候敷、何之道にても、筑前 公方様御前よきあち無之候ハヽ、いつみ殿間を御なをり候事之間敷との申事候、弥承届可申上候間、和泉殿へ御状なと被遣候共、其御心得被成可然候事、

(史料⑱) 元和八年五月一日 忠興↓忠利

一、黒筑・藤泉間之事承候ても、われく構二不成候、其方之事万事分別可有事二候、此儀不及申候へ共、我々事ハ、余所ハ火か降候共花か降候共、構なき事二候と申事候、乍去、藤泉へ■書中之心持、得其意候事、

(史料⑳) 寛永六年一月十三日 忠興↓忠利

一、藤泉・堀丹・脇淡路三人、大炊殿別而間能候而、方々振舞ニも此衆にて候由、大炊殿事二候間、心二合点ハめされ候はんすれ共、つれ悪候而笑止存ル事、

(史料㉑) では、高虎と黒田氏の関係について、忠興は忠利に対して情報収集を頼んでいる。(史料⑱)では、長政が高虎だけでなく土井利勝とも親しくなっているとの情報を聞き、忠利は忠興に対して、高虎に書状を出す時は、その事をふまえた上で出すように伝えている。この頃、忠興は忠利に対し、高虎と長政の間の事には関与しないように指示している(史料⑲)。堀直寄・脇坂安元については、寛永五年に高虎とともに利勝と親しいとの情報(史料㉑)を得た際に、忠興は不快の念を抱いている(史料㉑)。

このように、細川氏も高虎と同じく幕府から信頼され、幕政にも参画している場合がある。人脈を見ても、高虎と同様に幅広く人脈を持つており、高虎には見られない幕閣ルートも持っている。そして、細川氏ならではの特徴として、公家・文化人との関係もある。更に、細川氏自身も中世以来の名門大名である。名門であることと、公家・文化人とのつながりがあることで、細川氏は幕府にとって重要な大名であったであろう。

第二節 黒田氏

では、高虎や細川氏とは不仲であった黒田氏の場合はどうか。福田千鶴氏の論文を中心に見ていきたい。(49)

黒田氏は関ヶ原の戦いに際しては、長政が西軍の小早川秀秋に対して内応工作をするなど、徳川氏にとっては重要な役割を担っていた。また、それ以前の慶長五年(一六〇〇)六月に、長政は家康の養女を正室に迎えている。しかし、結果的には幕府対策は藤堂氏・細川氏らに比べると大きく出遅れ、幕府からは睨まれることになってしまう。

関ヶ原の戦い後の諸大名は、黒田氏に限らず、必ずしも徳川氏一辺倒ではなかった。福島・加藤(清正)・浅野氏にも共通している。黒田氏は、如水・長政ともに豊国社に献上品を贈ったり、参拝していることが何度もある。ただ、この行為は元和期になると見られなくなり、長政は慶長十四年以降は伏見・駿府・江戸のいずれかには参勤している。

しかし、大坂の陣に際しては、福島正則・加藤嘉明とともに嫌疑を受けて江戸滞留を命

じられた（加藤清正・浅野長政は既に死去）。これにより、黒田氏は豊臣恩顧大名としての位置を再認識させられ、以降は幕府に恭順姿勢を貫き、幕閣工作も行うようになる。

まず長政は正室や子どもを江戸に証人として送ったが、これは他の大名に比べると遅すぎるものであった。元和二年六月二十八日付の細川忠興書状には「一、黒筑朝倉藤十郎と別而知音ニなられ候、土大いもとむこにて候ゆへ、とり入可申内存と聞候由候へ共、大炊殿一切懇ぶりにて無之由候、然者安藤対馬前々々別而筑州知音ニ候、（後略）」とあり、朝倉宣政・土井利勝への接近工作が見られ、既に安藤重信とも親しくしていたことがわかる。

その他にも、大坂冬の陣の最中には本多正信・同正純・安藤直次・成瀬正成らに接近、元和期には先の利勝以外に高虎とも親交を深めようとしていた。

一方で、長政は人脈の広げすぎには注意していた。慶長十九年の大久保忠隣改易、元和八年（一六二二）の本多正純改易、寛永九年（一六三二）の加藤忠広改易に際しては、長政とその子忠之が嫌疑を受けている。福田氏は、幕府の改易・転封策による大名統制が強化された段階にあつて、「公儀」における不要な接触を避けることは、大名「家」の存続のために必須の要件であつたとしている。

第三節 高虎との関係・比較

さて、ここで細川氏・黒田氏と高虎を比較してみたい。

細川氏については、高虎と立場が似ている。幕府と良好な関係を保ち、崇伝や旗本といったパイプを持つて、幕府内部の情報を得ていた。しかし、高虎が細川氏と異なるのは、高虎も崇伝や正純から幕府内部の情報を得ていたであろう事に加え、高虎自身も將軍・大御所の側に仕えていたため、直接情報を入手できうる立場にあつたことである。後に幕府から「御譜代同前」に思うとまで言われた細川氏は外様大名の中でも特別な印象を受けるが、高虎はそれ以上に異色の存在であつたであろう。

このように、少し（とは言つても、大きな違いではあるが）立場の違いはあるものの、細川氏は外様の大大名であり、幕府と親しく、幕政にも一部参画しているなど、高虎とよく似た立場にある。高虎と細川氏の場合、境遇の相似というのも両者を結びつけた一因かもしれない。

黒田氏の場合を見てみると、明らかに高虎や細川氏とは幕府との関係が異なる。豊臣恩顧大名であることが大きく影響しているのは間違いないであろう。しかし、大坂の陣後は長政も対幕府工作进行している。このことから、今更ではあるが、対幕府工作―特に幕閣への接近―がいかに重要であつたかがわかる。高虎や細川氏は豊臣恩顧大名という立場をよく認識し、幕府に対して恭順し、早くから幕閣へ接近し、幕府にとって利となるような活動をした。それが幕府から信頼され、重用された理由の一つであろう。

第四章 高虎の活躍を可能にしたもの

さて、高虎の政治活動と人脈を見てきた。高虎が幕府に深く関わることできた要因とは何であつたのか。一つにはこれまで見てきたような、幕府内部から朝廷に至る幅広い人

脈であろう。そしてもう一つは幕府が高虎を必要としたためではないだろうか。最後に人脈面についてまとめ、幕府が高虎に求めたメリットと高虎の特質について考えてみたい。

第一節 人脈面

人脈については、前章で詳しく述べたので、それをまとめるに留めたい。まず、第一に家康・秀忠・家光との直接の関係があり、それは個人的な書状のやりとりや、藩邸への御成に見られる。最初にも述べたが、藤井氏の言うように、家康らの下で活躍した出頭人達は、家康らの信頼と恩寵によって取り立てられた。これは高虎にも言えると思う。家康らの信頼は、高虎がその側近くに仕えることのできた理由の一つであつたに違いない。

次に幕府内部での人脈であるが、金地院崇伝・酒井忠世・小堀政一は幕府内部の人間であり、高虎の縁戚であつた。これらの人物達と縁戚になったことで、高虎が幕府の中心に入りやすくなったばかりか、山本氏の指摘するように、藤堂家の存続にも有利にはたらいたであろう。

将軍・大御所側近では本多正信・正純父子・土井利勝・朽木元綱・天海もいた。崇伝も含めて、将軍・大御所が変わると、権力を持つ側近も変化していった。本多父子や崇伝の勢力が衰える一方で、土井利勝や天海が勢力を伸ばした。高虎は元々関係を持っていたのもあるかもしれないが、力を持つ側近が変わっても、次に力を持った人物と入魂になった。そして、権力の浮沈があつた側近達とは違い、高虎は徳川三代にわたって側近として仕え続けたのである。特に本多正純の改易に際しては、どういう理由からかはわからないが、高虎に火の粉が飛んだ形跡はない。

人脈面での高虎の動きは、常に周囲に目を配り、権力の浮沈を見極めていたようにも見える。また、大久保と本多、崇伝と天海という対立関係にある両者と高虎は関係が良好であつた。このあたりは、どちらからも睨まれると言えはそうではあるが、一方が相手の情報を得ようとすれば、逆に高虎は必要な人物となる。このあたりも高虎が生き残れた理由なのではないだろうか。他に保田・佐久間一族も高虎と幕府の間において、高虎には有利な人脈であつたであろう。

大名関係では、まず蒲生氏は徳川氏と直接結びついており、これも幕府の高虎に対する態度に影響していたに違いない。その蒲生氏が嗣子無く断絶したのは高虎にとつては痛手であつたかもしれない。しかし、縁戚ではまだ権力者酒井忠世が残っていたし、生駒氏も後に土井利勝と縁戚になり、これも有利にはたらいたはずである。

また、細川氏については前述のように、幕政に参画しているあたりは高虎と似ている。しかも、同じ外様の大大名である。山本氏は、幕政に参画した細川氏の行動について、「忠利の意見には、諸大名の実情を知らない幕府に、天下の立場から献策するという姿勢が貫かれており」、「幕府によって肥後の国主にまで取り立てられた忠利とすれば、「江戸の宮廷社会」を有利に生き抜くため、細心の注意を払い、幕府に忠実な態度を折に触れて表明する必要があつた。忠利の行動は、（中略）幕府から疑惑の目を向けられがちな、外様大名の不可欠な生き残り戦略の一つであり、彼が家光の信頼をえたのも、このような言動によってであつた」と分析している。⁽⁵⁰⁾

また、忠利の子光尚が死去した後に僅か六歳の六丸に相続が許されたことについては、

「その最大の要因は、身を粉にして幕府に忠誠を尽くした忠興・忠利の行動と態度にあった。これは、幕藩制下の外様大名の一つの選択であり、生き方であった。そして、じつは幕府の覇権は、忠利らのような大名たちの行動に支えられてはじめて実現したものであったのである。」としている。⁽⁵¹⁾このような見方は、高虎の行動に関しても言えるのではないだろうか。このように同じような立場にある者どうし、互いに幕府内部の情報を伝えあったりして、この時代を生き抜いていった、いわば戦友ともいえるのではないだろうか。

公家・文化人との関係で言えば、近衛家や小堀政一との関係が大きかった。高虎の場合、公家・文化人との関係は（確認できる限りでは）さほど見られない。しかし、その中でこの両者は確実に高虎と親交が見られた代表格である。近衛家は公家社会のトップ。かたや政一は文化界の代表者の一人である。トップを押さえることで、その下にある人脈を一気に確保したのかもしれない。二人との関係自体も大きかったが、二人を通した人々との関係もまた重要であつたはずである。

公家・文化人との関係は幕府が高虎を用いる理由の一つとなった可能性が高い。これは次節で述べる。

第二節 初期江戸幕府の事情と高虎の特質

高虎の活躍の要因として、人脈は幕府内に入り込むために必須であつた。それとともに、幕府が高虎を用いるにはそれなりの理由・メリットがあつたはずである。高虎が幕政に参画しようとしても、幕府にその需要がなければ用いられることはなかったであろう。では、幕府が高虎を用いた理由は何であつたのだろうか。そのあたりも含めて、高虎の特質を考えてみたい。

まず、初期の幕府、特に家康の生前は、その側近に幕府の旗本以外にも僧侶・商人・外国人といった、秀忠以降では殆ど見られないような面々がいた。そういう面においては、高虎も家康との関係次第で幕府内に入り込むことは可能であつたろう。

更に、家光時代に幕府の職制が確立されるまでは、後世では複数の職が持っていた役割を一人の人物が一手に引き受けているという場合もあつた。大久保長安や板倉勝重がその例である。⁽⁵²⁾なので、高虎もその能力に応じて、様々な場面で活躍できる可能性があつた。いわば、幕府の組織が未熟であつた故に、高虎が入り込む「余地」があつたのである。極論を言えば、（信頼等が必要であらうが）役に立つ人物であれば譜代であるかを気にせずに用いていたということである。

高虎は將軍・大御所の側近として仕えており、一見すると本多父子や土井利勝といった出頭人のようにも感じられる。実際はどうであらうか。

「はじめに」でも述べたが、山本氏の分析によると、大名にとっては幕閣とのルートを作ったり、幕府の情報を得たり、いろいろと相談したりする為に上級旗本との交際は重要であり、それは自家の存亡にも関わることであつた。例えば細川氏は土井利勝（幕閣）と関係をもつ為に加々爪忠澄らの上級旗本を頼っており、忠澄方も細川氏に幕府の情報を伝えている。そして、幕閣土井利勝を支えたのは、その卓越した行政処理能力もあるが、大名と日常的な繋がりを持つような旗本の存在もあつた。⁽⁵³⁾

幕府の側から見ると、大名の体面を潰すことなく、幕府の望み通りに振る舞わせるため

には旗本の存在が必要であった。

高虎の場合はどうであろうか。まず、大名の側から見た場合、旗本的な役割を高虎が果たしていた形跡はあまり見られない。しかし、(史料⑦)のように寛永五年には利勝・高虎・直寄・安元の親密さを窺わせる話があった。高虎の晩年であるが、利勝と大名の間に高虎がいることを示している。幕府の中枢におり、他大名との関係もいくつか持っていた高虎であるから、幕府中枢に直接関わっていない諸大名の中には、細川氏が利勝との関係を構築するために加々爪忠澄らの上級旗本を頼っていたように、旗本との関係構築や幕府内部の情報を得るために、高虎を頼りにする者もいたであろう。

そして、高虎自身も大名の一人であることを忘れてはならない。高虎も利勝や崇伝のような幕府内部の人脈を持っていた。しかし、評議参加メンバーや、將軍・大御所との関係を見ると、幕閣と同じく、直接將軍・大御所とも結びついていなかったであろう。ならば、高虎にとっては仲介となる幕閣・旗本が常にならなければならないという事が考えられる。

次に、幕府から見た場合、まず西国大名との関係がある。徳川氏が京都以西に勢力を配置できない時代に、伊予を領有した高虎は福島・加藤(嘉明)といった豊臣恩顧大名に目を光らせている。これは、前述のように高虎は徳川譜代ではなく、豊臣恩顧大名であった一方で、徳川氏にとっては譜代同前の側近といえる程近い関係にあったためである。家康はこれを利用して、豊臣恩顧大名である高虎を、実は徳川勢力として伊予に配置し、高虎を通じて西国大名の動向を把握しようとしていたのではないだろうか。徳川譜代の者にはできない、高虎ならではの事である。そして、高虎もそれによく応えた。

この高虎の両属性は二条城での家康・秀頼の会見時にも見られた。徳川勢力と豊臣勢力が交わる場で、高虎はどちらにも繋がっていた。この時も豊臣方の態度を少しでも軟化させる狙いが家康にあったのではないだろうか。ただ、逆に親豊臣の者からすれば、いかに豊臣大名であろうとも、高虎に対して良い見方をしていない者もいたであろうことは想像に難くない。これについては、まだその可能性があったとしか述べることはできず、その影響についてもはつきりとはわからない。今後の課題である。

さて、旗本の働きとして、幕府から直接は伝えにくい事を、旗本を通してそれとなく大名に伝えるというものがあつた。これは高虎にも言えるかもしれない。西国大名に対しては、旗本とともに同じ働きをしていた可能性もある。やはり、高虎の両属性のなせる事であろう。一方で、幕臣は幕府の意志としての書状を発給しているが、高虎にはそのような書状発給は見られないし、何らかの役職に就いていたというわけでもない。豊臣・徳川への両属性という点も旗本とは異なる。そもそも、高虎は徳川氏の家臣ではない。旗本とはまた違う性質を持った存在である。

細川氏の場合として、山本氏は「忠利の意見には、諸大名の実情を知らない幕府に、天下の立場から献策するという姿勢が貫かれて」といるとし、「幕府の覇権は、忠利らのような大名たちの行動に支えられてはじめて実現したものであつた」としていた。高虎も大名であり、細川氏の場合と同じ働きは当然していたに違いない。幕政に関わっているという事や、豊臣・徳川への両属性という点(これは細川氏には言えるかわからないが)を考えると、高虎や細川氏は一般の外様大名とも別の性質を持っていると思われる。高虎は徳川譜代が活躍できない場―それは特に徳川家の外―において様々な役割を果たしたと言える。

また、徳川氏は東海出身であり、上方に拠点を持ったのは関ヶ原後である。ということ

は、織豊政権に比べれば、上方とのつながりは薄かったであろう。それは徳川譜代にも言えることである。そのような状況下で、上方につながる人物は必要であったに違いない。そのような人物は多くいたかも知れない。その中で、その他の条件（信頼や能力など）を満たした高虎が重視されたのだろう。細川氏については、上方とは深いつながりがある点は高虎と同じであるし、信頼や能力もあつたであろう。それを考えると、細川氏も幕府から注目されたことは納得できる。

更に、家康はともかく、秀忠は家康に比べると権威はあまり無かった。それを格式の高い名族と関係を持つことで補おうとしたのではないだろうか。和子の入内もそういう性格があると思われる。細川氏は自信が名門大名であり、公家ともつながりがあつた。高虎は自身は名門ではないが、その人脈において、公家とのつながりがあつた。このような点も幕府が高虎に求めたメリットであつたと思われる。

以上のことから、高虎という人物の性質・特質を考える際には、従来の旗本や外様大名とは違うタイプの人物として捉えることが必要であろう。勿論、細川氏の場合についても、その立場・性質を考える必要がある。

おわりに

初期江戸幕府における藤堂高虎について見てきた。繰り返しになるが、高虎は初期江戸幕府において、家康・秀忠・家光の三代にわたって側近とも言える程に仕えた。そして、譜代の幕閣達とともに幕政の中枢にあつて、数多くの事柄に関与した。

これを可能にしたものは人脈と、初期江戸幕府ならではの事情であつた。人脈では、幕閣内に縁戚関係を作り、縁戚ではない人物も含めて幕府のその時々の権力者と良好な関係を築いていった。これは高虎の代だけではなく、高虎没後の藤堂家にも有利にはたらいた。また、近衛信尋や小堀政一を通して、公家社会・文化界にも幅広い人脈を持った。このように、高虎は様々な方面に多彩な人脈を構築していった。

そして、幕府の事情として、その政治組織の未熟さ故に高虎が入る余地があつたと思われる。そこで高虎は活躍するわけであるが、幕府が高虎に求めたメリットとは、豊臣・徳川両氏に繋がりを持つ両属性や、旗本と同じような、大名と幕府との取次的な役割、そして高虎の持つ公家社会とのつながりであつたと考えられる。

「はじめに」で挙げた問題に戻ると、藤野氏・藤井氏の説や、更に言えば従来の説では、初期幕政に武士以外の者の姿すら見えるのに、武士である外様大名の姿は無い。しかし、既に見てきたように、歴とした豊臣系外様大名である高虎は幕政の中枢にあつた。藤井氏は出頭人については天下人の信頼と恩寵で取り立てられたとしているが、高虎も家康・秀忠・家光の信頼を得ていたはずである。

また、政争・藩政指導・築城・大坂包囲網の形成・朝廷工作といった、実に様々な事柄に関わっているという事は、高虎にそれだけの能力が備わっていたことを証明するだけでなく、従来言われてきた幕政メンバー以外にも、このような能力をもって初期江戸幕府を支えていた者がいることを示している。それは幕府が能力のある者は譜代にこだわらず用いたということも示している。

初期江戸幕府では、まだ幕府の機構が不十分であったので、極論を言えば、信頼・恩寵・能力があれば、誰でも幕政に参画できる可能性があったと言える。山本氏の研究にある細川氏についても、その一例と言えるだろう。初期幕政を担った人物とその役割についてはまだ研究が十分とは言えない。

また、高虎の特質の一つとして、旗本に似た部分もあると述べた。山本氏は、幕府と大名の間に立っている旗本の役割について分析し、それが幕府を支えた一要因であるとしていた。それは旗本に限らず高虎にも言えることである。

一方、高虎は大名であり、旗本とは違う点もある。幕府直属の家臣でもないし、幕府の書状発給もしないし、幕府の役職にも就いていない。旗本の取次的役割に注目するならば、高虎のように、旗本ではないが、旗本と同じ様な役割を果たしている人物についても同時に見ていく必要があるのではないだろうか。山本氏は細川氏について、そのような特質を見出しているようにも見受けられるので、分析が不十分と言いつけることはできないが。そして、前述のように、その際には従来の旗本の概念とは別に、このような役割を果たした大名について、新しい概念をもって見ていく必要があるであろう。

更に、直接幕府内にあった外様大名高虎にとっては、旗本を介す必要が無かった場合もあったと思われる。旗本の役割は幕府と大名を仲介するものであったから、直接幕府内にいる高虎に幕府との仲介が常に必要であったとは考えにくい。幕府―旗本―大名という見方が当てはまらない場合についても検討する必要があるであろう。

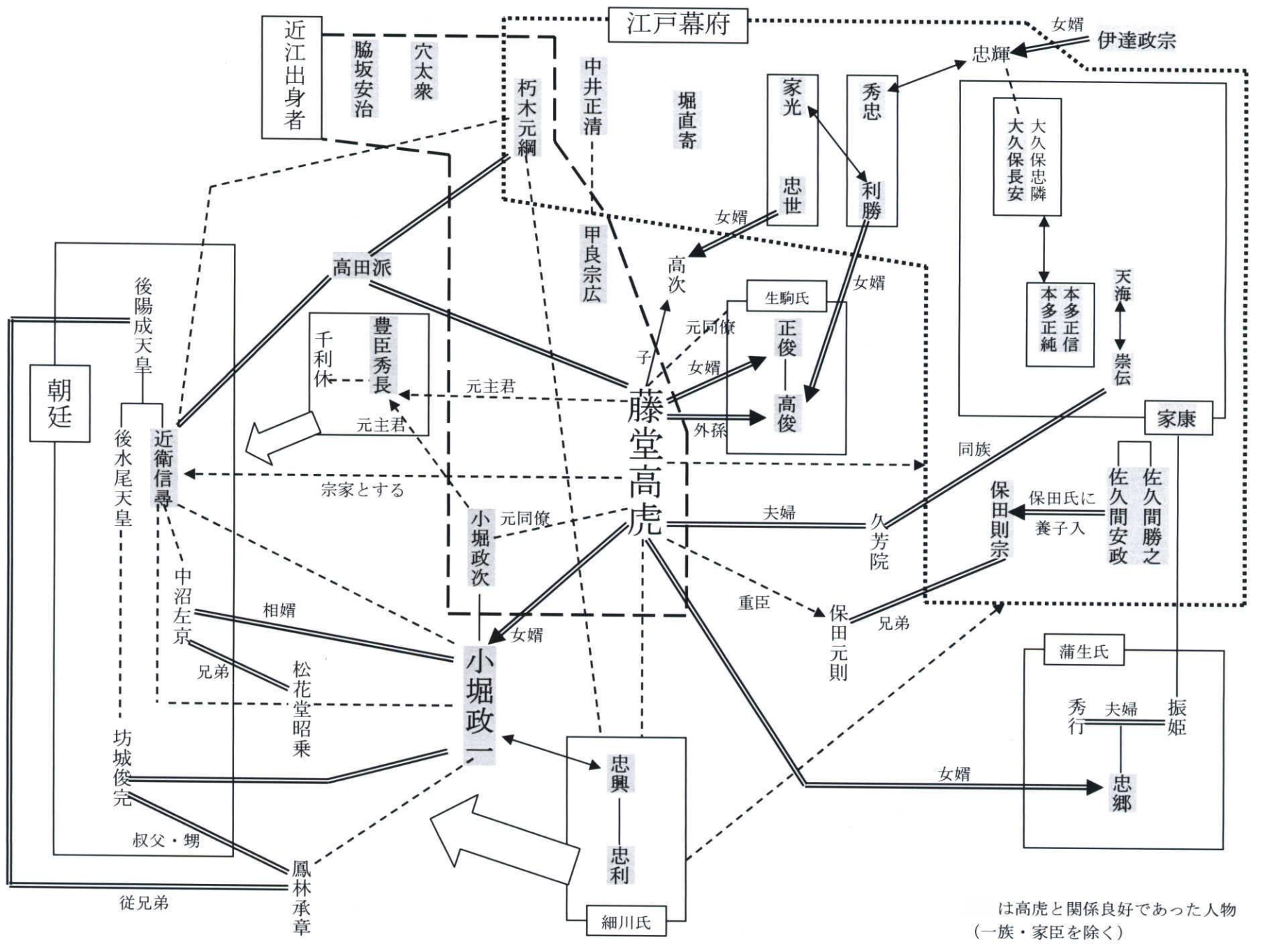
少々脱線になるが、山本氏は細川光尚没後の六丸相続許可には、それまでの細川氏の姿勢が影響していることを指摘していた。私にはあまり御家騒動に関する知識は無いが、藤堂家でも享保年間（一七一六―一七三六）に、藩内で独立運動が起き、幕府に知れることとなるが、独立派が処罰されたのみであった。これは細川氏の場合と同じく、藤堂家（高虎であるが）の幕府に対する姿勢が影響しているのかもしれない。であるならば、高虎の存在が幕府にとっていかに重要であったのかを示す一例になろう。

家光の時代に幕府の機構が一応の確立を見てからは、まさに譜代中心となつてしまい、幕末まで外様大名が幕政に顔を出すことはほぼ無い。しかし、まだそのような時代になつていない初期の幕政における外様大名の関わりについては研究が進んでいない。「譜代中心」という殻を破つて、外様大名にも注目しなければならぬ。そしてその役割は「幕政」という、よく目に見える部分だけではなく、幕府と大名の間に立つという、一見目立たないが重要なところにもあった。

初期江戸幕府を支えた人々として、従来のメンバーは勿論であるが、高虎のような外様大名―それは特殊な存在であるが―も含めて考え、初期幕政を見直していく必要があるのではないだろうか。

今回の論文作成にあたり、指導教員藤田達生氏・日本史ゼミをはじめ、その他多くの方々より御指導をいただいた。ここに感謝の意を表し、御礼申し上げます。

藤堂高虎をめぐる人物関係図



は高虎と関係良好であった人物
(一族・家臣を除く)

—— 親子・兄弟 == 縁戚

----- 関係あり(良好) <--> 不仲・対立

◁ 公家・文化界との交流

〔註〕

- (1) 藤井讓治氏『江戸時代の官僚制』（青木書店、一九九九年）八三―九九頁
- (2) 藤野保氏『徳川幕閣』（中公新書、一九六五年）六三―六六頁
- (3) 藤野氏前掲書 一〇七―一二三・一二七―一二二頁
- (4) 藤井氏前掲書 四九―五一頁
- (5) 藤井氏前掲書 五八―五九頁
- (6) 山本博文氏『寛永時代』（吉川弘文館、一九九六年）（旧版は吉川弘文館から一九八九年に刊行）一二頁
- (7) 山本氏『江戸城の宮廷政治』（講談社学術文庫、二〇〇四年）（原本は読売新聞社より一九九三年に刊行）七一―七三・一七六頁
- (8) 藤井氏編『近世前期政治的主要人物の居所と行動』（京都大学人文科学研究所、一九九四年）
- (9) 『高山公実録』は江戸時代末期に成立した、藤堂高虎の一代記。藩の指示により、藩校内で編纂されたとみられる。体裁としては、綱文を掲げ、それに続いて典拠史料を引用している。また、適宜「謹按」として編纂者の意見を挿入している。
- (10) 『宗国史』は十八世紀頃に成立した藩の正史。著者は藤堂高文。漢文体で記されている。高虎・高次・高久の三代の歴史の他、藤堂家に所蔵されていた書状集、家臣の略伝から藩政に関わるものまで幅広く記述されている。
- (11) 藤田達生氏『日本中・近世移行期の地域構造』（校倉書房、二〇〇〇年）二五六―二六四頁
- (12) 藤田氏『日本近世国家成立史の研究』（校倉書房、二〇〇一年）三六二頁
- (13) 藤田氏前掲書 三七五―三七六頁
- (14) 『大日本史料』第十二編之八 慶長十六年三月二十八日条
- (15) 鍋本由徳氏「慶長期における駿府政権の対大名意識―嵯峨天龍寺塔頭陽春院一件を素材にして―」（『戦国史研究』四二、二〇〇一年）
- (16) 藤野氏前掲書 七―八頁
- (17) 大野瑞男氏「大久保長安の「遺書」（『日本歴史』四七二、一九八七年）
- (18) 『三重県史』資料編 近世1 「藤堂文書」所収
- (19) 『三重県史』資料編 近世1 「藤堂文書」所収
- (20) 藤田氏前掲書 三八六―三九〇頁
- (21) 朝尾直弘氏『朝尾直弘著作集 第三卷』（岩波書店、二〇〇四年）二二―二二三頁
- (22) 朝尾氏『朝尾直弘著作集 第四卷』（岩波書店、二〇〇四年）三五三―三六四頁。
引用されている「藤堂家記」に高虎の恫喝の様子が記されている。朝尾氏は、「藤堂家記」は信用できない点もあるが、高虎の交渉の顛末を記した一次史料「元和六年案紙」と合致する部分もあり、無視できないとしている。
- (23) 『宗国史』『賜書録』『高山公実録』『公室年譜略』に収録
- (24) 梅原三千『津藩史稿』（三重県立図書館蔵）

- (25) 山本氏前掲書 八五―八九頁
- (26) 『大日本史料』第十二編之四十九 元和八年十月一日条所収「本多男爵家文書」
- (27) 『大日本史料』第十二編之十一 補遺 慶長十六年七月是月条
- (28) 『大日本史料』第十二編之四十九 元和八年十月一日条
- (29) 圭室文雄氏『政界の導者 天海・崇伝』(吉川弘文館、二〇〇四年) 五一―六頁
- (30) 圭室氏前掲書 二二―二三頁
- (31) 管見の限りで集めたもの。これらの文書は『高山公実録』・『公室年譜略』・『宗国史』・『三重県史』資料編 近世1 に収められている。
- (32) 大寫聖子氏「近世初頭大名細川家の情報収集―徳川家康隠居への対応―」(『地方史研究』三二七、二〇〇七年)
- (33) 山本氏前掲書 一〇八頁
- (34) 藤井氏『江戸時代の官僚制』五五―五八頁
- (35) 西島太郎氏「中・近世移行期における朽木氏の動向―国人領主から旗本・大名へ―」(同氏『戦国期室町幕府と在地領主』八木書店、二〇〇六年、所収)
- (36) 奥出賢治「徳川十六将図」の大研究」(『歴史読本 徳川四天王』第五十二卷第三号 新人物往来社、二〇〇七年)
- (37) 『公室年譜略』は十八世紀後半に成立した藤堂藩の歴史書。著者は中級藩士であった喜田村矩常。高虎の生誕から延宝五年(一六七七)までが記述されている。その他、家臣団の分限もある。『高山公実録』では、その典拠史料の最も有力なものの一つとなっている。
- (38) 『公室年譜略』二二二頁(慶長十五年此年条)
- (39) 『大日本史料』第十二編之二十九、元和四年十一月三日条
- (40) 深谷克己氏『津藩』(吉川弘文館、二〇〇二年) 七〇―七二頁
- (41) 熊倉功夫氏『小堀遠州の茶友たち』(大統書房、一九八七年) 三二―四頁
- (42) 『高田本山の法義と歴史』(真宗高田派宗務院、二〇〇三年)
- (43) メンバー、松花堂昭乗・中沼左京・鳳林承章に関する解説とも、熊倉氏前掲書 五九―六四・七二―七八・一四〇―一六一・一七七―一八三・二二―二七・二二―四―二二九・三二四―三二九頁
- (44) 森蘊氏『小堀遠州』(吉川弘文館、一九六七年)
- (45) 新人物往来社編『豊臣秀長のすべて』(新人物往来社、一九九六年) 一四二・二一九頁
- (46) 甲良町教育委員会『藤堂高虎』(一九九三年) 一四・二七頁
- (47) 山本氏前掲書・米原正義氏編『細川幽斎・忠興のすべて』(新人物往来社、二〇〇〇年)・福田千鶴氏「慶長・元和期における外様大名の政治課題―黒田長政を事例として―」(『九州文化史研究所紀要』三七、一九九二年) など
- (48) 大寫氏前掲論文
- (49) 福田氏前掲論文
- (50) 山本氏前掲書 二一七・三一―三八頁
- (51) 山本氏前掲書 三三五頁
- (52) 藤井氏前掲書 二九―三〇・五三―五五・一〇七―一〇八頁

(53) 山本氏『寛永時代』九—一二頁

〈参考文献〉

〔史料〕

上野市古文献刊行会編『宗国史』(同朋舎出版部、一九七九・八〇年)

上野市古文献刊行会編『高山公実録』(清文堂出版、一九九八年)

上野市古文献刊行会編『公室年譜略』(清文堂出版、二〇〇二年)

『寛永諸家系図伝』

『寛政重修諸家譜』

『熊本縣史料』一・三(熊本県、一九六五年)

『三藐院記』(『史料纂集』、一九七五年)

『史料総覧』(東京大学史料編纂所)

『大日本近世史料』「細川家史料」一、十七(東京大学史料編纂所、一九六九—一九九二年)

『大日本史料』(東京大学史料編纂所)

『本源自性院記』(『史料纂集』、一九七六年)

『本光国師日記』(『大日本仏教全書』、一九三一—一九三七年)

『綿考輯録』(汲古書院、一九八八—一九八九)

〔自治体史〕

梅原三千・西田重嗣編著『津市史』一(津市、一九五九年)

『三重県史』資料編 近世1(三重県、一九九八年)

〔辞典〕

阿部猛・西村圭子編『戦国人名事典』(新人物往来社、一九九〇年)

『国史大辞典』(吉川弘文館)

『国書総目録』(岩波書店)

〔著書・論文・編纂物〕

朝尾直弘『朝尾直弘著作集 第三卷』(岩波書店、二〇〇四年)

朝尾直弘『朝尾直弘著作集 第四卷』(岩波書店、二〇〇四年)

梅原三千『津藩史稿』(三重県立図書館蔵)

太田浩司『テクノクライト小堀遠州』(サンライズ出版、二〇〇二年)

大寫聖子「近世初頭大名細川家の情報収集—徳川家康隠居への対応—」『地方史研究』三二七

大野瑞男「大久保長安の「遺書」」『日本歴史』四七二、一九八七年

奥出賢治「徳川十六将図」の大研究」『歴史読本 徳川四天王』第五十二卷第三号 新人

物往来社、二〇〇七年

久保文武『藤堂高虎文書の研究』(清文堂出版、二〇〇五年)

熊倉功夫『小堀遠州の茶友たち』(大統書房、一九八七年)

『顕彰堯朝上人』（真宗高田派宗務院、一九九六年）

甲良町教育委員会『藤堂高虎』（一九九三年）

佐藤豊三「將軍家「御成」について」六・七『金鯢叢書』七・八、一九八〇・一九八一年）
新人物往来社編『豊臣秀長のすべて』（新人物往来社、一九九六年）

高田派専修寺遠忌法務院文書部編『専修寺史要』（高田派専修寺遠忌法務院文書部、一九九二年）

『高田本山の法義と歴史』（真宗高田派宗務院、二〇〇三年）

圭室文雄『政界の導者 天海・崇伝』（吉川弘文館、二〇〇四年）

鍋本由徳「慶長期における駿府政権の対大名意識―嵯峨天龍寺塔頭陽春院一件を素材にして―」（『戦国史研究』四二、二〇〇一年）

西島太郎「中・近世移行期における朽木氏の動向―国人領主から旗本・大名へ―」（『戦国

期室町幕府と在地領主』（八木書店、二〇〇六年）所収）

西山光正訳『実伝藤堂高虎』（同氏訳『津藩祖藤堂高虎公』改訂版）

西山光正訳『津藩祖藤堂高虎公』（二〇〇一年）（梅原三千『津藩史稿』高虎伝の現代語訳）

林泉『藤堂姓諸家等家譜集』（一九八四年）

深谷克己『津藩』（吉川弘文館、二〇〇二年）

福田千鶴「慶長・元和期における外様大名の政治課題―黒田長政を事例として―」（『九州

文化史研究所紀要』三七、一九九二年）

藤井譲治編『近世前期政治の主要人物の居所と行動』（京都大学人文科学研究所、一九九四年）

藤井譲治『江戸時代の官僚制』（青木書店、一九九九年）

藤田達生『江戸時代の設計者』（講談社現代新書、二〇〇六年）

藤田達生『日本近世国家成立史の研究』（校倉書房、二〇〇一年）

藤田達生『日本中・近世移行期の地域構造』（校倉書房、二〇〇〇年）

藤野保『徳川幕閣』（中公新書、一九六五年）

森蘊『小堀遠州』（吉川弘文館、一九六七年）

山本博文『江戸城の宮廷政治』（講談社学術文庫、二〇〇四年）（原本は読売新聞社より一九九三年に刊行）

山本博文『寛永時代』（吉川弘文館、一九九六年）（旧版は吉川弘文館から一九八九年に刊行）

米原正義編『細川幽斎・忠興のすべて』（新人物往来社、二〇〇〇年）

なお、東京大学史料編纂所ホームページも参照させていただいた。